COBALT-SERIES

前田珠子

不死なる者

いにしえこいうた
古戀唄



集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

いにしえこいうた
古戀唄

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

古戀唄（いにしえこいうた）

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者　古戀唄

天を支える者　古恋歌……7

天を支える者　古戀唄……73

あとがき……187


ガジェス
ファラストース侯
爵家の三男坊。
クランクレイア
「女神の娘」と呼ばれる
ディエーン王国の王女。


スカルトード
超絶美形の青年で、ナルレイシアとは本好きの「同志」。
ガスカール
ナルレイシアの護衛官となった青年侯爵。彼女とは犬猿の仲!?
ファティ・リンシャ
ナルレイシアが奉公する「魔法屋敷」の女主人。当代の柱神さまとも仲良し。
ナルレイシア
「不幸中の幸の権化」と呼ばれる本好き少女。次代の「柱神」さまを決める「選定者」になってしまい!?
登場人物紹介

イラスト／明咲トウル

天を支える者　古恋歌（いにしえこいうた）

プロローグ

それはディエーン王国の『空』を現在支えている柱神アマンシールの屋敷に招かれてのお茶会でのことだった。

招待されたのは、新たな柱神となるべき人物を見定める役目――『選定者』と呼ばれている――を負った少女ナルレイシア。と、その護衛を任じられたエルスカーネ公爵ガスカールと、彼女の本の虫同志にしてすっかり協力する気満々――実のところ、彼女が師匠と呼ぶ相手の豊かな蔵書にちょっぴり下心を抱いている――のスカルトードという絶世の美青年である。

そこに、魔法屋敷と評判の、不思議の館の女主人――ファティ・リンシャと皆から呼ばれる高貴にして愛される初老の婦人――をまじえての雑談は、最初、知識人揃い

の集まりに似つかわしく——難を言うなら、最年少のナルレイシアが十六歳であり、いかにその年齢としては水準以上のものを抱えていようと、知識ではなく経験値の不足ゆえに少々甘いところを残していたことは否定できないが——歴史や文化といった面に焦点を当てたけっこう高尚な話題で賑わっていた。

それが——どこでどう間違ったのか、話題が恋愛小説関連にそれたあたりから、よくわからない展開になってしまったのだ。

そうした話題を毛嫌いしているガスカールは、風向きが怪しくなったとたん、即座にその場を退席した。

もしかしたら、過去こうしたさりげなさを装ってのやりとりで、けっこう苦労させられる局面に立たされたのかもしれない、とは、招待客中一番の新米であるナルレイシアの感想である。

しかも、茶会の途中で退席することを、あっさり茶会の主……もとい主人であるアマンシールが笑って許したことから、どうやらこれが初めてのことではないらしいことが見て取れた。

（ガスカールはロマンス関係には苦手意識を抱いている、と）

心のメモ帳に、しっかり書きこんだナルレイシアであったが、それはいかにもありそうに思えたこともあり、意外には感じなかった。

目を瞠るほど驚かされたのは、その後のことだった。

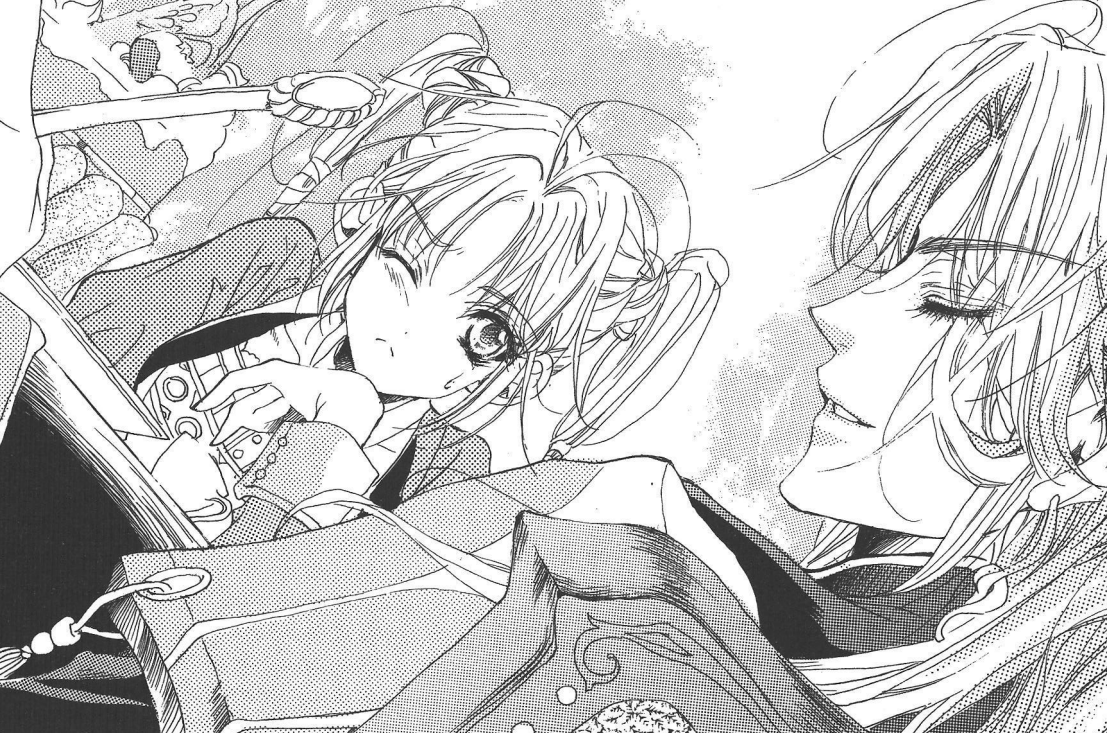
「流行小説だからといって、馬鹿にはできないと思いますのよ。時代や社会が異なろうとも、なぜか似たようなパターンの作品が、世間を席巻しているのですものね」

「黄金律というものですね。確かにそれは認めますが、それらの作品がみな、現実性を備えていない、夢物語めいた展開を示していることも忘れてはいけませんよね」

そう指摘したのは、本の虫としての同志であるものの、多分けっこうナルレイシアの思いもつかないような部分で人生経験を積んでるだろうことを窺わせることも多い美青年スカルトードだった。

「物語ゆえの、美しい虚構と言えるでしょうね。確かに恋や愛ゆえに、運命を変えるという展開は美しくも劇的ですが、そんなことはまずありえないかと」

スカルトードの言葉に、正直うなずきたくはなかったが、ナルレイシアは完全に否



定することもできなかった。

なぜなら、故郷フィレアでの災難の後、実際に世間に広まった噂では、のべつまくなしに屋敷の女性に言い寄っては、誠意のない愛の言葉を語っていた某御曹司ではなく、その彼を袖にした形になった彼女のほうが性悪の浮気娘であり、そちらのほうが悪いことになったという実体験があったからだ。

権力者がその気になれば、事実などいくらでもねじ曲げられるものなのだと、身をもって知ってしまった以上、「愛は勝つ」と無邪気には思えない。

もっとも、それでも、そんな愛の形があったらいいな、という希望は捨てきれないわけなのだが。

まるで、そんなナルレイシアの心中を読み取ったかのように——もちろん気のせいに違いないのだが——ファティ・リンシャが「ふ、ふふ」と声を上げた。

「ふたりとも、まだまだ甘くてね。確かに世界の命運を変えるほどに劇的な恋の話は、伝説か与太話かわからないぐらいに遠いこととしてしか知らないけれど、ひとつの国程度の運命を変える恋、ならねえ……わたくし、実際に知っていてよ。なにし

ろ、長生きしている知り合いには事欠かないものですからねえ！」

自慢げに、そう告げるファティ・リンシャを、なぜかアマンシールが止めに入った。

「ファティ・リンシャ！　それは……！」

「なにを焦っているの、アマンシール？　心配しなくても、あなたの醜聞やら失敗談を、わざわざこの子たちに教えようだなんて思っていませんよ？」

それきり、アマンシールは口を噤んだわけだが……なぜだろう、それ以降のほうが、肌に感じるぴりぴり感が増したような気がした。

それでも。ナルレイシアはファティ・リンシャの話の先が聞きたかった。

（こういうのを、猫を殺す好奇心っていうのかしら？）

そうは思ったものの、興味を抑え込むことはできなかった。

ファティ・リンシャが唆すような問いを口にしたのも……まずかった。

「どう？　聞きたくはなくて？」

「き、聞きたいです……」

と、ナルレイシアが恐る恐る答えるのとほぼ同時に、熱心に恋愛小説談義に参加していたスカルトードも答えた。

「後学のためにも、是非」

ファティ・リンシャが朗らかに笑った。

「よろしくてよ」

その隣では、なぜかアマンシールが苦い顔をしていた……。

一

「故人の名誉にも係わることだから、実名は明らかにできませんけどね」

そう前置きをして、ファティ・リンシャが語り始めたある恋の話は、そこらへんに転がっている物語など話にならないくらい劇的且つ胸躍るものだった。

私情を交えず、事実だけを淡々と語る口調はそっけないといってもいいほどだったが、想像の翼という武器を持っているナルレイシアにとって、それは障害にはならなかった。却って、思う存分羽ばたかせなさいと言われているような気すらしたものだ。

それは……出会いからして素晴らしかった。

「出会ったとき、ふたりはまだ幼かった。ガジェスはとある名門の三男で、なのに王

立学院への入学を決めたばかりのころのこと。彼は父親に連れられて、初めて王宮を訪れたのよ」

そのファティ・リンシャの言葉に、現実には聞こえない音をたてて、ナルレイシアの想像の翼が広がった。

王立の教育施設は、なにも目新しいものではない。暗黒時代以前にも、確かに存在していたものだ。

しかし、暗黒時代に道連れにされた形で、世界中の才能が集う都と呼ばれた神聖学都が消滅したことにより、各国の王立学院のその水準とありように大きな変化がもたらされたのである。

水準が上がったのはいうまでもないが、それまでほとんど王侯貴族の子息のための手習い塾扱いだったのが——本当に才があり、しかも向学心に溢れた者は当然のごとく学都留学を選んでいたのだからおかしな話ではない——学都の理念をも受け入れた体制に変わったのである。

すなわち、全身分にその門戸を開いたというのがそれで、おかげで貴族以外の出身

でも意欲と才能さえあれば、政治にまで参加できるようになったわけである。

当然のことながら、その入学試験は甘くはない。

財や権力にもの言わせての鼻薬などきかないわけだから、どんなに名門の出身であっても我が身ひとつで勝負するしかない――それが王立学院入試なのだ。

（大貴族に生まれたのなら、わざわざ恥をさらす必要はないからって、評判の高い博士や知識人を形ばかりの家庭教師に招いて、それで箔をつける連中も珍しくないという話なのに……なんてご立派で公正な方なのかしら。もちろん、ご両親がしっかりした信条をお持ちだったのに違いないけれど、でも実力がなければ合格できない試験に受かられたんだもの、ご本人も相当な覚悟の上で、血のにじむような努力をなさったに違いないわ）

十一歳の若さにも拘らず、それだけの決意と信念を胸に抱いた少年――きっと、その心ばえに相応しく、凛々しく毅然としていたに違いない。

ナルレイシアの心は、すでに暴走準備完了状態だった。口の悪いガスカールが、いまこのときの彼女を見れば、「心にでなく頭に羽を生やしていないか？」とでも突っ

込みかねなかったろう。

しかし、ガスカールはここにはいない。

そして、ファティ・リンシャは、ナルレイシアの想像の翼に、さらなる力を与えたのである。

「彼女は……クランは七つ。生まれたときより女神の娘と呼ばれていたとおり、彼女はまさに空から突然、ガジェスの前に現れたのです……」

ここで、完全に、ナルレイシアの想像の翼暴走モードにスイッチが入った。

以降耳にした言葉は、彼女による思いこみ変換を余儀なくされた。

その善し悪しを問うことはできないが、変換後の、彼女が認識した話の流れは……以下に述べる通りである……。

ガジェスはかなり困惑していた。

王立学院入学を機に、せっかくだから顔見せも兼ね、という父の思惑のもと、王宮

に連れられてきたはいいが、問題の顔見せ――相手はもちろん国王陛下である――がすんだ途端、突然王宮の庭の散歩を勧められたからである。

有無を言わせぬ強引な提案は、「邪魔だから、しばらくそこいらをほっつき歩いていろ」という命令にしか思えず、仕方ないので、言われる通りに周囲をほっつき歩いたわけなのだが、初めて訪れた王宮の庭は、冗談のように広かった。

早い話が、迷ったのである。この地域では見かけない植物に心奪われ、散策用の小道を外れてしまったのが、最大の敗因だった。ガジェスは自然科学――特に天文学や生物学になみなみならぬ興味を抱いており、王立学院を目指したのも、それらを深く学ぶためだった。そんな彼にとって、この庭はまさに宝の山だったのだ。

心ひかれるままに、図鑑でしか見たことのない植物を見つけるたびに、そちらへ足を向けた結果、立派な迷子と成り果ててしまったというわけだ。

十一にもなって、しかも王宮で迷子とは、いかになんでも情けない。父と国王の話し合いがどれほどかかるかは不明だが、それまでには少なくとも本殿付近にはたどりついておきたかった。捜索隊など出されてはいい恥さらしである――。

と、ガジェスは考えたわけではない。

幼少時から、その手のことに目のなかった彼は、実は迷子の常習犯（？）だった。珍しい動物や植物を見かけたとたん、歌う魔女に誘われる船乗りよろしく、ふらふらと足をのばしては迷ってしまうという、周囲の人間にとっては迷惑きわまりない特技の持ち主だったのだ。

この王宮を訪れる前にも、そのことを熟知している父からきつく言い渡されていた――間違っても、王宮で迷ってはくれるな、と。さらには、もしそんなことになったら、王立学院への入学も取り消す用意があるぞ、とまで言われていた。

ガジェスとしては、それだけは絶対に避けたい事態だったので――致命的な悪筆である彼は、試験に際し、他人にも判読可能な文字を書くために、死ぬほど嫌いな手習いに、かなりの時間を費やしたのだ――なるべく見晴らしのいい場所を探すことにした。建物さえ見つければ、そこに駆け込み、本殿までの道を尋ねられると思ったのだ。

が、意外に奥に入りこんでしまったのか、なかなかその『見晴らしのいい場所』が

見つからない。

どうしたものかと、真剣に焦り始めたガジェスの頭上から、突然声が降ってきたのはそのときだった。

「退きやっ！」

それはまだ、幼い少女の声だった。

（なぜ、上から……？）

と、見上げる間もなかった。

「退きやというのに！」

苛立たしげな声とほぼ同時に――少女は空から降ってきた。

そして。

「二度も言うたのに……そなたは言葉がわからんのか？」

呆れたように――あるいは嘆かわしげに、問題の少女はため息まじりにそう問うてきた――うつ伏せに倒れたガジェスの背中に乗ったままで。

それが十一歳のガジェスと、七つになったばかりの王女クランとの出会いだった。

「怪我はないか？」

そう尋ねたのは、ガジェスではなく少女のほうだった。

落ちてきたほうの、しかもずいぶん幼い少女に心配されるのは、なにかが違うと思ったものの、立ち上がったガジェスを見上げる少女の眼差しが、刻一刻と苛立たしげな光を強くしていくのを見て、彼はうなずいた。

「はい、大丈夫です」

少女が誰かは知らなかったが、王宮の庭にいるのだから、王族の一員と見なしたほうが無難だろうとの判断で、彼は丁寧な言葉を選んだ。

身分の高い人間ほど、相手の言葉づかいに神経質になるのは、古今東西を問わずほぼ常識だった。こちらが相手を知らないことなど理由にならない――いや、その無知すら怒りの対象となりかねないのだから、気をつけるに越したことはないのだ。

彼自身には、そうした心の動きはわからないのだが――そうした性格もあって、彼

は風変わりだと言われるのだ――このときの彼にとって、降ってきた少女は二重の意味で重要人物だった。機嫌を損ねるわけにはいかなかった。

「お気遣い、ありがとうございます。ですが、わたしより、その……そちらはお怪我などありませんか？」

注意深く言葉を選んで、ガジェスは問いかけた。

彼女が王族のひとりなら、殿下と呼んでも差し支えないのだが、万が一自分と同じように父親に連れられてきた貴族の令嬢かなにかであった場合、その勘違いは間違いなく笑い話となって宮廷に広まり、いらぬ恥をかいたと、父が怒るのは明白だ。

渋々とはいえせっかく王立学院への入学を認めてもらったばかりの――しかも隙あらば、その許可を取り消すつもり満々なのだ、彼の父親は――ガジェスは、慎重にならざるを得ないのだ。

しかし、そんな彼の事情など知らぬとばかりに、少女は大げさに顔をしかめてこう答えた。

「怪我はないが、お尻を打った。そなたのせいじゃぞ。そなたが素直に退いておれ

ば、こんなへまはしなかった！」

お前が悪いと決めつけられ、ガジェスは困った……本当に、困った。

場所がお尻とあっては、つるんと剝いて確かめるわけにもいかないではないか。

ふよふよ放浪歴のせいで、打ち身切り傷の類の応急処置にだけは長けているという自覚のあるガジェスだったが、患部の確認すらできない状況ではお手上げである。

数瞬思案した後、彼は一番妥当な案を実行した。

少女に背を向け、そのまま身を屈めたのだ。

「王宮は初めてで土地勘はありませんが、道順を教えていただければ、お連れできると思いますが」

おぶさるようにと、両手を後ろにのばしての提案に、なぜか少女は狼狽したらしい。

「な、なんのつもりじゃっっ!?」

なんのつもりもなにもないガジェスは率直に答えた。

「だって、お尻が痛いんでしょう？　腰か足か、どちらか傷めたかもしれませんか

ら、やはりここは大事を取って、無理に歩いたりしないほうがいいと思いますよ。あまり腕力がないので、おんぶで我慢してください」

そう告げたガジェスの背中に、幼い体重がのせられてくることは――なかった。

（やっぱりおんぶじゃ格好悪くてイヤなのかな？　でも、目的地までの距離もわからないこの状況じゃ、絵物語とかにでてくる『お姫様抱っこ』はきつすぎるぞ）

と、自分の体力を正確に把握した上で、どうしてもイヤだと拒絶されたらどうしようと思案しはじめた彼に、少女は意外そうな声で問いかけてきた。

「そなた……本当のところ、わたしのこと、知らぬのではないのか？」

しまった、とガジェスは思った。

高貴な身分に生まれついた者のなかには、異様に高い自意識を持ってらっしゃる方も珍しくはない。

大抵そういう意識は、周囲からもてはやされる時間の蓄積によって肥大していくものだから、この幼さではまだ大丈夫だろうと思ったわけだが……まずかっただろうか？

そんな彼の心中をよそに、少女はさも得心がいったとばかりに呟いた。

「そうであろうな。でなければ、この程度のことで、そこまでわたしを心配するはずがない……」

至極当然のように呟かれた言葉だったが、耳にしたガジェスにとっては、とんでもない話だった。

高い場所から落ちてきた少女の身を案じる——それはごく当たり前のことではないのか。その少女が体の一部に痛みを感じていると訴えるのであれば、それを労り、極力彼女に負担をかけないようにして、治療できる人間のいる場所までつれていきたいと思うのは……当然のことではないのか。

そんな彼の疑問を読み取ったかのように、少女は告げた。

「そんな必要はないと、みな思っておるからのう……」

まさしく、ガジェスの心を見抜き、少女は名乗った——淋しげに。

「わたしはクラン。それとも女神の娘と呼ばれていると言えばわかりやすいか？」

ガジェスの受けた衝撃は……巨大だった。

2

王家に降臨した女神の娘の話は有名らしかった。
興味のないことには指一本動かそうとすらしないガジェスは知らなかったが、そのことを聞いた友人が仰天するほどには、それは有名な話らしい。
国王が夢のなかで女神と出会い、恋に落ちたというものだ。
そしてある日、王は生まれたばかりの女の赤ん坊を臣下に披露し、こう宣言した。
「これは余と女神との間に生まれた王女である」
と――。
王にはすでに、隣国から迎えた王妃との間に王子をふたり儲けていたが、相手が女神ということで、この子供は半神の王女として王宮に迎え入れられたのだ。

（それが、あの姫君だというわけか……）

なんだか、少々意外に思ったガジェスだった。

女神の娘というからには、もっと神々しい雰囲気があったり、突き抜けた言動を見せたりするものではないかと勝手に思いこんでいたからだ。

もちろん、思い込みには違いないが……記憶に残る彼女の印象は、どこまでも生命力に満ちあふれたたくましいまでの人間の少女というもので、しかもその印象こそを大切に取っておきたいと感じてしまったものだから、

（間違っても、公言はできないよなぁあ）

と思った。

もっとも、あの出会い自体事故のようなものだったのだから、二度とあのときの少女と会うことはないだろうと思っていた。

自分はこれから王立学院で思う存分自然科学を学んだ上で、政治には関係のない、一般には閑職と言われる部署でのんびり楽しく働くことになることを、このとき彼は信じて疑っていなかったからだ。

ところが運命とはわからぬもので、王立学院の入学式を数日後に控えたある日、ガジェスは父ともども、再び王宮に呼び出されることになり、しかも国王直々に、クランの話し相手にと頼まれてしまったのだ。

本音を言うなら、ようやく手にした学業三昧の自由な時間を、我が儘王女のためになど無駄に費やしたくはなかったのだが、いかんせん、相手はこの国の国王陛下そのひと——まさに鶴の一声だった。

断ることもできず、週に一度ほど、クランの話し相手を務めることに同意したとき、ガジェスはただ気が重いとしか思わなかった。

もっとも、王女を訪ねるうちに、彼女がほかの……貴婦人予備軍とでも呼ぶべき少女たちとは、かなり違うことを知り、好感を抱くようにはなったわけだが。

当時の女性は、学問に興味を覚えること自体、はしたない、慎みのないこととされていた。文字の読み書きや文章学に通じていても、それらを彼女たちが活用できたのは、詩や私的な書簡、日記ぐらいに限られていた。

ところがクランは、日記という形をとって、実にさまざまな自然現象の観察記録を

とり、後に調べた結果までも付記していたのだ。

雲はなぜ流れるのか、またなぜその形を変えるのか——草木はなぜ花を咲かせるのか、そうしてどうやって種子を形成するのか等々。

教師の導きなしに、よくぞここまで、と感心させられるような記述が少なくなく、そんな彼女の風変わりさを知るにつれ、ガジェスも彼女への好意を強くしていった。だが、彼の彼女に対する感情が、単なる厚意でおさまらなくなるできごとが起こったのである。

それは、ふたりが出会って半年ほどが経ったころのこと——。

いつものように、王宮を訪ね、クラン付きの侍女に取り次ぎを頼んだところ、急の不調でクランが寝込んでいるのだと聞かされたのだ。

季節の変わり目でもあったため、そういうこともあるかと納得し、ガジェスは帰ろうと思ったのだが……初夏の緑の気配に誘われる形で、久しぶりに王宮の庭に生息する植物の様子を確かめたくて仕方がなくなり、ふらふらっとさまよい歩きだした。

幸い、王宮の庭については、どこでも出入り自由のお許しを国王からもらっていた

ため、誰にも邪魔されずに彼は歩きつづけた。

濃厚な緑……否、生命力の発露を感じさせる庭の木々や草花の気配を感じながらの散策は、彼にとって心楽しいひとときだった。

そう——周囲の空気とは異なる、不協和音としか呼びようのない声を耳にするまでは。

なにかが……いや、誰かが泣いていた。

こんなところで？

こんなところで——そう、彼がついふらふらと迷い込んでは脱出するのに四苦八苦するぐらいに奥深い場所で。

こんなところまで入りこむ侍女はまずいない。こんな場所があることを知る女官もまず少ないだろう。

そんな寂しい場所から、なぜか知っているすすり泣く声が聞こえてきたとき、ガジェスはいったいなにごとかと思った。

恐る恐る目を向けてみれば、案の定クラン王女がいた。

ただ、これまで一度も見たことのない、口元を手で覆って、必死に声がもれないようにして泣いていたのが衝撃だった。

こんな、人知れない場所なのだ、思う存分誰かを罵ったり、我が身の不幸を嘆いて大声で泣いても、ちっともおかしくはなかったのに……まだ八歳にもなっていない少女は、決してそうはしないのだ。

その気丈な振る舞いを見て、立派だと見なすひとはいただろう。さすがは王家に降臨した女神の娘だと、褒めそやすひとはいただろう。

けれど、ガジェスはそんな気には……こぼれるほどに咲き誇った卯の花の下で、身を震わせ泣いている彼女をそんな風に褒めてやりたくなどなかった。

そして、なにもできない自分に気づかされた。

卯の花の茂みの陰で、身を小さくして声もなく泣きつづける少女を前に、ガジェスは途方に暮れてしまったのだ。

気丈な彼女のそんな様子を目にしたのが初めてというのがまず第一。第二に……そうした風情の相手を前に、どんな対応をすればいいのか、皆目見当がつかなかったの



である。

これが、見知らぬ令嬢であったり、面識はあったにせよ、さしたる思い入れのない相手であれば、彼はすぐにも回れ右していたことだろう。

しかし、クラン……そこで声を殺して泣いていた少女は——その存在と姿は。

決して見逃すことも無視することもできぬものだったのだ。

心のどこかを、引っ張られるような抵抗を感じた。

やめろ、よせ、と言われているような気さえした。

けれどガジェスは一歩を踏み出した。

どうしても、彼女を放ってはおけないと思ったからだ。

彼女——クランを。

彼は、彼女を驚かせないよう、足音を殺してそっと近づいた。

そうして、尋ねた。

「なにをらしくもない風情で泣いてらっしゃるんです？　本当にあなたとも思えない……いったい、どうなさったというんです？」

自分以外の誰かがこの場を訪れるとは、夢にも思っていなかったのだろう、クランははっと息を呑み、ガジェスを見上げた。

そうして姫君としてはいささか乱暴な仕種で涙をぬぐうと、「なんでもない」と強気に言い放った。

なんでもないから、放っておいてほしい、と。

こんな泣きはらした顔をして、なんでもないはずがないと、おとなしく言われたままに放っておくことなどできないと――なぜか、そんな簡単なことが聡明な彼女にわからないのかと、内心首を傾げたガジェスは、不意にひとつの可能性に気づいた。

彼女は女神の娘――不思議な力を女神より受け継いだ奇蹟の娘だ。そんな彼女の言葉に、周囲はもしかしてこれまで異を唱えることをしてこなかったのではないか――そう思ったのだ。

女神の娘だから、ひとりでいても危険なことが起こるはずがない。女神の娘の言葉に逆らう真似はすべきではない――そんな愚かしい思い込みのもと、周囲が彼女の言葉通りの対応をしてきたというのなら……。

（それは放任の枠を外れてるぞ）

放置、無視に近いかもしれない。

全員が全員、そうやってきたのなら、彼女はもっと手のつけられない我が儘娘に育っていたに違いないから、そうではない人物も少なからずいたのだろうが……これはひどすぎる、とガジェスは思った。

とても放ってはおけなかった。

「なんでもないはずがないでしょう？　本当にどうなさったんです？　まさかと思いますが、どなたかに苛められたんですか？」

これには、クランは猛然と反論した。

「馬鹿を言うな！　女神の娘たるわたしに危害を加えるような者がおるはずがないだろう！　いいからどこかへ行け。わたしは……大丈夫だから」

泣き顔を見られた気恥ずかしさゆえか、少女の声からは段々と力がなくなっていく。

それでも、自分が立ち去った場合、彼女がまた泣くのではないかと思えてならない

ガジェスは引き下がらなかった。

立ち去れという彼女の言葉だけ、綺麗に無視して、彼はなおも話しかけた。

「では、なにか悪戯をされたとか？　意地悪なことを言われたとか？」

今度は、どうやら当たりだったらしい。

「……そんなことはない」

と、クランが答えるまでに、ほんの少しの間が空いた。

それでも、なにを言われたのかを、素直に口にするつもりがないのは、彼女の瞳を見れば一目瞭然だったので、彼は事情を聞き出すのではなく、気分転換させることに目的を移した。

「たとえ小さな嫌がらせでも塵と一緒で積もるとけっこう大変なんですよね。かく言うわたしも大貴族出身ってことだけで、目の敵にされたりしますからねえ」

普通、大貴族の子供は学校になど通わない。

名高い博士や知識人を、屋敷に招いて教育を受けるのだ。

財政上あまり豊かとは言えない貴族であれば、家督を継ぐ可能性の低い第二子、第

三子などは神殿直属の神学院で学ぶことも珍しくはないが、ガジェスの生まれた侯爵家ほどの名門にあっては、それすら珍しいことだった。

ガジェス本人としては、大好きな自然科学を学ぶためとはいえ、派閥争いがすっかり教育機関にまで浸透してしまっている神殿に入るのはちょっと……と思った結果の選択だったのだが、なまじこれまで平民出身の学生ばかりが集まることで知られていた王立学院内における、彼の立場は……あまり居心地のよいものではなかった。

あーんな嫌がらせや、こーんな嫌がらせや……他愛ないものからタチの悪いものまで、実はけっこう体験済みだったりしたのだ。

そういえば、こんなことも、あんなこともあったなー、などと遠い目をするガジェスを前に、クランは最初こそ、「なんでもないと言っておるではないか！」と大声で張り上げていたのだが、聞く耳をもたない彼の呟く「あー、そういえば、こんなことがあったなぁ」、「そうそう、こんなこともあったっけ……いやあ、思い出してみると、実はけっこうひどい苛めを受けてたってことになるんですかねえ」等々の台詞に——彼女が興味を覚え始めた——とみるや、具体的に受けた嫌がらせの数々を披露し

たあたり、彼は話術と人心掌握術に、ただならぬ才能を持っていたのかもしれない。

「……さすがに、期限三日前に、書きかけの小論文とそのための下書きが部屋から消え失せた挙げ句、資料に使った書物が全部図書室から借り出されていたときには……もう落第しか道は残されていないかとも思ったものですが……」

「ど、どうやって切り抜けたんだ？」

興味津々で尋ねてくるクランに、ガジェスはあっさりと答えた。

「内容は頭に入ってましたから」

と。

ただし、同じようなことが繰り返されるのではどうにもまずいと思った結果、

「ちょっと仕返しさせてもらったんですよ。似たようなこと、何度もやられても面倒なだけでしょう？　だから、そういうつまらない嫌がらせに血道をあげている連中のひとりが、実はとっても足の多い虫が苦手だって噂で聞いて知ってたものですから、ベッドのなかにほんの十数匹蜘蛛やムカデの類をね。あの夜の寮内に響いた悲鳴は、ちょっとした戦利品ですね」

悪戯を告白したガジェスの前で、クランは体をくの字に折って笑い転げた。

「そ、それでは子供の悪戯と変わらないではないか。そんなことで、本当にそなたへの嫌がらせは止まったのか？」

クランの笑いながらの質問に、ガジェスは大まじめにうなずいた。

「子供の悪戯というところが大事なんですよ。虫が嫌いな当人以外にとっては、他愛のないこととしか受け取られませんからね。そんな悪戯に目くじらを立てて洒落にならないような仕返しをしたのでは、大人げないと友人たちの評価も下がるわけです。学生時代に培った人脈は、官吏志望の彼らにとって重要な意味を持ちますからね、自分の評判には人一倍気を遣うものなんですよ」

これにはクランも得心がいった様子でうなずいた。

「なるほど、ジェスがやられたのと同じようなことをやり返したのでは、泥仕合になってしまうが、子供っぽい悪戯なら、相手もそれほどひどい報復にはでられないというわけだな？　だが……本当に虫が嫌いな人間にしてみれば、とても笑って許せることではないと思うのだが？」

少なくとも女官に同じことをしたら、まず間違いなく報復されるだろうし……と、ぽつりとクランが洩らした一言で、ガジェスは彼女を泣かせるほどの陰険な『口撃』をしたのが、一部の女官であることを知った。

おまけに、どうやら角の立たない報復方法を考えはじめるぐらいには立ち直った様子なのに気づき、自然と口元が綻ぶのを感じた。

王女に対してはいささか難があるかもしれないが、たくましいという表現がぴったりの少女だと思ったのだ。

だから、彼はこっそり女性に効果的な悪戯を教えてあげることにした。王宮の庭の一角に自生する芙蓉の若い木――ただし、一輪か二輪の蕾をつけたもの――を鉢に植え替え、問題の女官たちに贈ってはどうかと提案したのだ。

芙蓉は夏から秋にかけ、淡紅色の美しくも繊細な花を咲かせるのだが、手入れを怠るとすぐに虫がつくことを知る女官は、あまりいないだろうことを逆手にとっての作戦だった。

しかし、その話を聞いたとき、クランは難しい顔で首をかしげた。

「しかし、特定の女官にだけ被害が出たのでは、意図的な計画だと見破られてしまうのでは……」

と、そこまで言いかけたクランが、慌てて口を手で塞いだ。

なんともいまさらなのだが、その仕種の可愛らしさに、ガジェスは肩入れする気満々になった。

「大丈夫ですよ。王女が手ずから掘って贈ってくれた芙蓉の若木を、本当に大切にしたいと思う方なら、きっと庭師や植物に詳しい方に相談してでも正しい手入れ法を学ばれますとも。そうでない方の鉢植えに、不幸にして毛虫が大量発生したところで、当人の不注意としかなりませんよ。後は本当に申し訳なさそうに、虫の卵が産みつけられていたことに気づかずにいたことを、騒ぎの後でお謝りになれば、まず絶対に大丈夫です。口上は……まあ、そうですね。思い切りしゅんとした様子で、『芙蓉に虫がつくなどとは知らなかった……喜んでほしかっただけなのに、却って迷惑をかけてしまった』とでも言っていただけたら」

実のところ、年端もいかないこんな幼い少女を、人目のない場所で泣かせてしまう

一部の陰険女官たちの所業に、かなり腹を立てていたガジェスの復讐計画は、自分になされた嫌がらせに対するそれより大規模なものだった。

美しい芙蓉の若木――蕾も膨らみ、開花を待つばかり……そんな時期に、続々と生まれる毛虫の群れ。女性の多くが、足の多い虫とともに、足のない爬虫類や毛虫に対し、恐怖にも近い嫌悪感を抱くことを、ガジェスは知っていた。

そして、クランがそのつもりなら、全面的に協力するつもりだった。

しかしクランは、うなずかなかった。

「ほんと、楽しそうだ。……でも」

でも、という一言で、彼女は自分の意思を引き締める。

まだ彼女は七歳なのにだ。

「ジェスはそそのかすのがうまい。うっかりその気になるところだった」

そんな小さな体で、そこまで我慢することはないのだと、いっそ大声で言いたいくらいだったのだが、彼女はその我慢さえ日常のものとして片づける日々を送っているのだ。

「……その悪戯は、本当にどうしようもなくなったときのためにとっておこう」

言って、クランは晴々と笑った。

「ジェスは……まるで、三人目の兄上みたいだ」

当時、王家に王子は二人――末子とされるクランに『三人目』の兄など存在しなかった。

なぜだかぐすり、と胸に痛みが走った。

なぜかもわからぬまま、慌てて彼は答えたのだ。

「わたしにとっても、あなたは、目の離せない、心配で仕方ない妹のような……家族のような人ですよ」

畏れ多いことですが――と、付け加えた彼の言葉に、クランは悲しげな笑顔で応じた。

「ちっとも畏れ多くなんかない。だってわたしは、王女でも女神の娘でもないから……わたしは、多分叔母上の……」

次いで呟かれた一言は、ささやきよりも小さな声で告げられたにも拘らず、ガジェ

スの心を突き刺した。

不義の子供だと思うから――。

その瞬間、ガジェスのなかで、いらぬ噂話に興じたあげく、目の前の少女の心を傷つけた陰険女官たちへの報復措置が決定事項として処理された。

結果として、この後数人の王宮勤めの女官が職を辞すことになったのだが、それはまた別の話となる。

3

「実際には不義とは言えない事情だったという話ですが、彼女が国王の実娘でなかったのは真実でした。彼女の実の母親は、国王の妹姫で、彼女が十になる直前に病を得てこの世を去ったという話です。婚約者さえいなかった王妹殿下の妊娠を知った当時の国王は、妹姫と生まれてくる子供を守るために、実娘としてクラン姫を迎えたのでしょうが、どこにも詮索好きな人間はいるということでしょうね。名を明かせぬ父親を持つ子供だと、当時は面白おかしく一部の者たちの間で噂されていたそうですよ。まったく、下卑た輩の好奇心ほど迷惑なものはありませんわね」

苦々しげに告げるファティ・リンシャの意見に、心からうなずいたナルレイシアだった。

しかも、物心つかないころから、聞こえよがしにそんな噂やさまざまな憶測を絶えず耳に注がれて育ったとなれば、クラン姫の心には、どれほどの傷が残されたことか。

ふられた腹いせに、悪意まみれの『ないことないこと』の噂を振りまいてくれた某田舎男爵家の御曹司のせいで、かなり不愉快な思いを味わわされた経験を持つナルレイシアにとって、それはとても他人事ではなかった。

「心ない噂や言葉が、ときにどれほどひとを傷つけるか、想像できないひとが多すぎます。わたしがそこにいたら、絶対一緒になって陰険女官掃討作戦に参加してました！」

きっぱり言い切ったナルレイシアに、くすくすと笑いながら、ファティ・リンシャはこうつづけた。

「そう熱くならないでちょうだい。結局、彼女が十歳の誕生日を迎えたときに、その名誉は回復されたのだから……彼女は確かに王の娘ではなかったけれど、とある国の柱神さまと、王妹姫との間に生まれたご息女であることを、当の実父に当たる柱神さ

まが認められたのですからね。誰も、真実神の娘である彼女を軽んじることはなくなりました……けれど、だからと言って、再三再四傷つけられてきた心が素直に他人を受け入れられるはずもない……姫君が、ごく一部の親しいひとにしか心を開かれなかったのは、無理もないことだと思いますよ」

それはその通りだろうとナルレイシアも思った。

さんざん自分のことを不義の子ではないのかと、面白おかしく噂していた連中が、実は確かに王女ではなかったが、真実柱神を父に持つ至高の存在だったことがわかった途端、見事なまでに掌を返してきたら……自分なら、どう感じるだろうと……それはすでに、考えるまでもないことに思えた。

けれど、それが自分を包む世界の大部分であったなら……信じるに足ると思える存在は数えられるほどしかなかったのではないのか。

そんな彼女の心中を読んだように、ファティ・リンシャは重々しくうなずいた。

「……真実神の娘であることが知れたクラン姫に対して、国の内外を問わず数多の求婚者が名乗りをあげたということです。けれど、心に傷を負った彼女は、どんな縁談

にも首肯しなかった。不憫な妹の忘れ形見である彼女を幸せにしたいと願った国王は、彼女が心を許し、慕っているガジェスとの婚約を整えようとしたのです」

彼女の幸せのためにも、王家の血を引く神の娘を他国に与えないためにも。

なにより、ふたりが惹かれあっている事実ゆえに。

「けれど、それが新たな悲劇を招いたのです」

沈鬱な面持ちで、ファティ・リンシャはそう告げた。

「なぜならガジェスは……彼は――」

新たなる、国の支柱――時代の柱神の候補に選ばれてしまったのですから――と。

事実は小説より奇なり、という言葉を、ナルレイシアはしみじみ噛みしめた。

どんな大河ロマン小説でも、ここまで劇的且つ不吉な展開はなかったであろう。

自らの想像力の限界を感じ、ナルレイシアは膝を正してファティ・リンシャの話を拝聴することにした。

乙女心のわくわくどきどきは、すっかりなりを潜め、いまではすっかり、これからふたりはどうなるのかと、はらはらどきどきの心境になっていた。

なんの冗談だと、最初にその話を耳にしたとき、ガジェスは思った。

国――というより、世界の大地と天との間……『空』を支える存在であるところの柱神（ちゅうしん）が、資質のある人間のなかから選ばれることを知ったときには、それほどまでの衝撃は受けなかった。

なるほど、『空』のなかには、生きとし生ける者と、そのために必要なもののほとんどが存在している。

それらを支える務めを負う者が、そのことをよく知る人間から選ばれるとしてもおかしくはない……そこまでは、すんなり得心（とくしん）がいったガジェスはしかし、この現実だけは認められなかった。

なぜ、よりにもよって、自分が次代候補に……しかも、筆頭候補に選ばれなければならなかったというのか!?

事実、声を荒らげ、彼は拒絶しまくった。

「わたしは御免です！　なにが楽しくて、嬉しくて、ひとより長い寿命を押しつけられなければならないんですか!?」

権力者が最後に望むこと――不老不死、あるいは不老長寿に対して、彼はかけらの関心も示さなかった。

同時に、周辺各国で当たり前のように行われている、柱神の世代交代を機にした王家の交代に対してもだ。

そんなことは、やりたい人間がやればいい――まさに勝手にやってくれというのが、彼の本音だったのだ。

彼はもう、ひとりだけ不老長寿になっても嬉しくない事情が生じていたし、自分がそんな変な立場になったあげくに国政に変化が生じることを不都合に思う状況が出来上がっていたのである。

出会ったときから印象的で、決して忘れられなかった少女と、初めて互いの心を通わせ合えたのは、ほんのこの間のことなのだ。

そうして両家の親や家族や親族を説得してようやく一緒になれそうな雰囲気に持っ

ていけそうだと思った矢先のこの騒動。

全くもって冗談ではなかった。

柱神に選ばれるということは、人間から神の眷属に生まれ直すということだ。当然、人間としての籍はなくなり、それどころか人間として生まれ育った痕跡までも抹消されてしまう。無論記録上でいなかったはずの存在とされても、周囲の人間の記憶まで消し去られるわけではないが、人間として、クランと結婚することは不可能になる。

そんな関係が、許されるはずがない。彼女は……クランは王女なのだから。また、彼女を愛する義父や義兄たち——つまり国王と王子たちだが——は、彼女には人間としての幸福を摑んでほしいと願っている。どう考えても、許してもらえるはずがない。

やはりここは、断固として拒否するしかないと心を固めたガジェスに、しかし次代を見極める役目を負った選定者である老人は、ため息まじりにかぶりをふってこう告げた。

「若干の誤解があるようですから説明させていただきますが、次代さまを選ぶのはわしではありません。次代さまの半身となる神宝……この『貴人の午睡』が選んだ御方を正確に見極め、お渡しすることこそが、真なるわしの務めなのです。知る者も口を噤む暗黒時代のことですから、ご存じないのも当然ですが、かつて神宝はさまざまな思惑のために、真実の半身でない者の手に渡ることがございました。そうして本来の半身でない者を半神に生まれ変わらせた結果として、虹神さまがたより授けられた百八の神宝の内、実に半数近くが、力を使い果たして砕けたり、歪んで本来の力を発揮できなくなってしまったのです。現存する神宝にも、当時の傷跡は残っております……おわかりか？　神宝をこれ以上失わぬためには、その真実の半身が絆を結ばねばならないのです」

それは衝撃の事実であり、同時に凶悪な脅しだった。

柱神を誕生させるための神宝は、すでに半数近くが失われている。これ以上失われるようなことになれば、いつ天と地の間に存在する『空』が破綻するかしれない。

そんな事態を避けるためには、神宝に選ばれた人間はそれを天命と受け入れるしか

ないのだと……老賢者は言ったのだ。

「こちらには、拒む権利もないというわけですか？」

問うたガジェスに、老賢者は「わかりませぬ」とかぶりをふった。

「暗黒時代より以前のことにて、文献に残されてはおりませぬが、神宝に選ばれながら、柱神となることを辞退なさった方がいなかったわけではないこと、口伝にて知ってはおります。ですが、その方法がわからぬ上、それをすでに多くの傷を負うてしまった神宝に繰り返してよいものかどうかも……正直、我等にはわからぬことのほうが多いのでございますよ」

目の前が真っ暗になるとは、こういうことなのかと、そのとき初めてガジェスは知った。

「では……せいぜい、選ばれぬことを願うことしかできない、と？」

「実を申せば、神宝に選ばれたことを白紙に戻す方法が、ただひとつだけ存在いたします。ですがそれは若君のお心に添わぬものと思いますゆえ、敢えて申し上げませんでしたが」

その言葉に、ガジェスは深くうなずいた。

「確かに……老師。その通りです」

ガジェスが望むのは、人間としてクランとともに築き上げる未来だ。

神宝の半身として選ばれるのがイヤで命を絶つなど論外だった。

だからガジェスは必死に策を考えた――クランとふたりで、どうすれば周囲と軋轢を起こすことなく、ともに平穏にくらしていけるか、を。

柱神に選ばれなければ簡単だが、たとえ選ばれたとしても、彼は彼女を諦めるつもりなどない自身の心に気づいていた。いや、正確には気づかされたのだ――もし神宝に選ばれたなら、拒絶することは許されないと、選定者に断じられた瞬間に。

決して諦められない願いがあると、初めて知った――ならば、かなえるために全力を尽くすしかない。たとえそれが、どれほど困難なことであろうとも。

心を決めたガジェスの行動は早かった。

決して世間に自分の行動が知られぬよう、病を理由に屋敷に籠もり、それまで興味のなさゆえに知ろうとも思わなかった情報を集め始めたのだ。

政治や経済、さらには国内の権力分布の状況など――名門貴族であるばかりでなく、優れた政治家として活躍する彼の父と兄たちは、これ以上はない教師となってくれた。内乱による国力の疲弊を考えれば、王家の交代は好ましいことではないと、冷静に判断する彼らの意識は、当時としては異端だったかもしれない。

彼らに野心がないなどとは、ガジェス自身信じてもいなかった。しかし、ここ十数年のうちに目覚ましい勢いで版図を広げてきた隣国の脅威を考えたとき、内乱など起こして相手につけ入る隙を与えるよりは、賢く立ち回り、自家と国の利益を守るほうが得だという判断を下す程度に冷静だった家族に対して、感謝の念を覚えたのは確かだった。

その世界において海千山千と評される知識と経験を積んだ彼らの協力が、この上なくありがたかったのも――また事実だ。

少なくとも、ひとかけらの興味も持てなかったおかげで、知ろうとすらしなかった政治関係の問題点やら解決策やらを、彼らは惜しげもなく披露してくれたのだから。

もっとも、事情が変わり次第、あっさり王家交代の道を選ぶつもりも満々らしいこ

とまで感じ取れて、ガジェスとしてはかなり複雑な心境を味わわされたのだが。

（いっそ、クランと一緒にどこかに駆け落ち……なんて、できるわけないけど）

本音を言うなら、どことも知れない田舎でクランとふたりでひっそりと暮らしたいところだが、まあ今の状況で、それが許されないのは明らかなのだから、次善策でいくしかない。

起伏の激しそうな人生になることを、わかっていても避ける気になれなかったのだから仕方ない——と、ガジェスは片づけた。

（あと、事態が落ち着いた後であのひとたちが欲張ったりしないよう、締めるところは締める準備ぐらいはしておくべきかな？　でも、それってかなり骨の折れる作業だよなぁ。こんなこと、四六時中やってて平然としてるだなんて、あのひとたちって、頑丈すぎ！）

それは……そんな呑気なことを考える余裕があったということは、彼の肉親に対する——正確にはその能力に対する——信頼の念あってこそのものといえたかもしれない。

そして、その思いゆえに、彼は事態終息まで秒読み状態に入った時点で、屋敷に届けられた手紙の内容に無関心ではいられなかったのである。

あと少し。

もう少しで、すべてはまるく収まるはず――そんな時期に届けられた手紙には。

クランが大怪我を負ったことが記されていた。

正直なところ、罠の可能性を考えなかったといえば嘘になる。

ガジェスが次代柱神候補に選ばれたことは、世間にこそ広まってはいないが、選定者である老賢者が、黄神神殿の高位神官であることもあり、国の上層部にはかなり知られていたのだから。

彼の生家の思惑に関係なく、彼自身を目障りに思う勢力が複数存在することを、さすがにガジェスも知っていた。

たとえば、他の次代候補の家族や肉親、彼の生家の勢力拡大を危惧する政敵たち。

まだ、選ばれたとははっきりしないゆえに、神罰を受ける危険なく、彼の抹殺は可能だと考える勢力は数多いるのだ。

だからこそ、刺客の襲撃を避けるために、屋敷に閉じ籠もっていたのだから。とはいえ見舞いの品々のなかに、毒入りの菓子や飲み物、果てには毒を塗布した珍しい書物まで見つかったとあっては、完全に安心できる場所などないというのが実情だ。

しかし、それでも、屋敷の中と外では、危険の度合いが違いすぎる。

彼が、堅牢な守りの敷かれた屋敷から出ることがあれば、その暗殺は格段にたやすくなるのは自明の理というもの。

父や兄たちの目に触れる心配のない経路で手紙が届けられたということも、かなり怪しい。

そうとわかっていても、ガジェスは飛び出さずにはいられなかった。

クランの身を案じる心と、手紙をくれたひとへのかけがえのない親愛の念ゆえに。

そのひととクランを疑うぐらいなら、死んだほうがましだとまで、思えるひと、だったから。

だから——だから。

その瞬間、ガジェスの心を襲ったのは、怒りでも絶望でもない、ただの……純粋な悲しみだった。

「なぜなんです？」

と、ガジェスは問うた——クランの負傷という真実を、そのまま餌に仕立て上げ、自分を呼び出したその……旧知の、親愛なるひと——クランの兄である王子コンシャスに！

「なぜ？」

三人だけが知る秘密のやりとりの方法を用いて、いま、ガジェスとふたりだけになれる場を整えた年長の王子は、今にも泣きだしそうな顔で問い返してきた。

「こちらこそ、逆に聞きたいところだよ、ジェス。王朝の交代に伴い、前の王家の直系はもちろん、縁者にしても近い関係にあったものは葬り去られるというのが常識だと、君は知っているはずだ。旧きものは、葬られる前に、自衛の手を考えなければならない。そしてそれは、新たな者が選ばれてしまった後では手遅れなんだ」

相手の言わんとするところはわかった。

確かに、正式に神宝に選ばれた存在を害すれば、神罰が下る可能性は否定できない。

「けれどっっ！　わたしにも、わたしの家族にも、そんな大それた野心などありません！　調べていただけたら、すぐにでもわかることばかりです！」

だから、やめてくださいと、振り下ろされる刃を必死に避けながらガジェスは叫んだ。

王家を乗っ取るだなんてことは、かけらも考えていないのだと……だから、こんな安易な方法に走ってほしくないのだと、言いたかったのに、コンシャスはますます顔をしかめた。

「お前の理想はどうでもいい！　……お前が……ほかならぬお前が、わたしたちを裏切ることなどありえないとわかってる！　お前の家族にしたところで同様であることもだ！　だが、他の候補者とその肉親はその限りではないんだ……王家の弱体化の気配を感じ取った各貴族は、すでに次王朝のための体制を整えようとしているのだ……

王家に次代候補が見いだされなかったせいで！」

そして、彼は、血を吐くような声でこう叫んだ。

「元凶なのかきっかけなのかは知らぬ！　だがそれが、我が王朝を蝕む害虫となる！　わたしはそれを見逃すことはできない！」

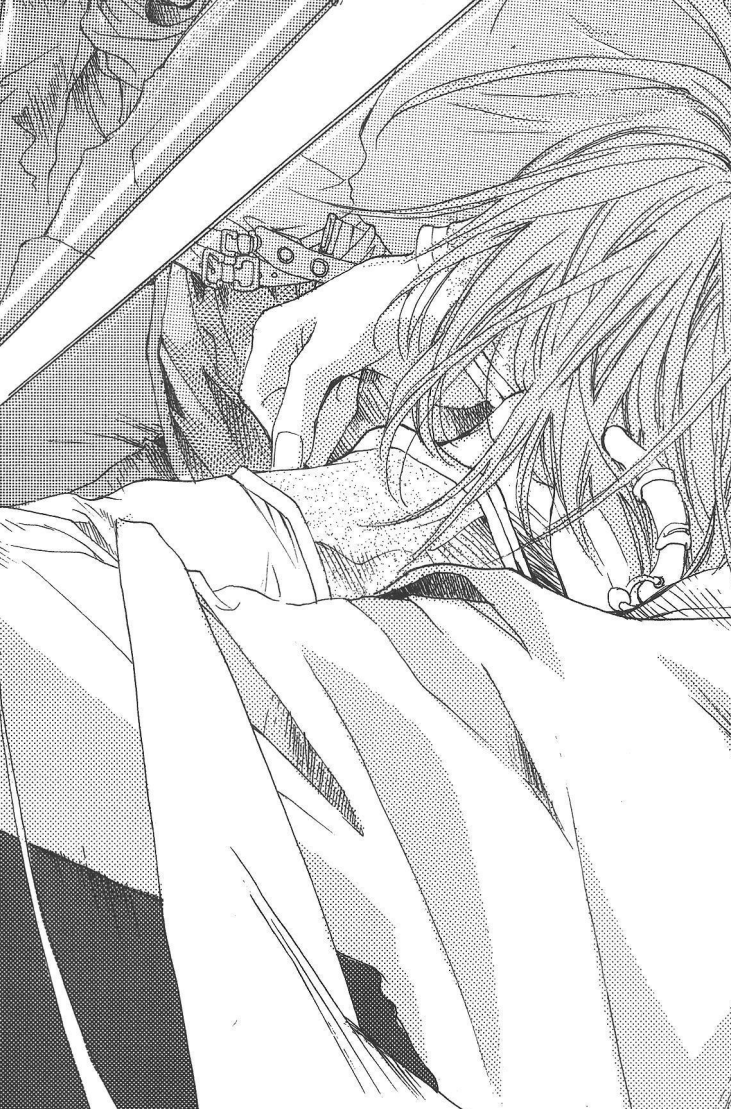
お前を潰すことでしか、愚かな野心を抱く他の奴原の意気を挫くことはできないのだ――と、刃を振り下ろしてくるコンシャスの姿を目にした瞬間、ガジェスのなかから、反撃してでも助かろうという思いが消え失せた。

決して死にたかったわけではない。彼は政道の裏技を用いてでも、クランと添い遂げる未来を望み、実現させるつもりだった。

けれど、いま、自分に刃を振り下ろそうとしているひと――コンシャスを傷つけてまで欲しい未来なのかどうか、正直わからなかったのだ。

だから――ガジェスは、自分の命を絶つに違いない刃を、ただ静かに見つめていた。

聞こえるはずのない、あるひとの声が耳に飛び込んでくるまでは。



「ジェス！　兄上！　やめてっっ！」

風霊に殊の外愛されているクランは、通常ではあり得ぬ力を発揮し、両者の間に出現した――その瞬間、奇蹟が起こったのだ。

エピローグ

ナルレイシアは想像力豊かな少女である。
ついでに言うと、ロマンティックな展開の物語が大好きな少女でもあった。
だから、ファティ・リンシャが意味ありげなところで――しかもかなり劇的な場面で――話の腰を折ったとき、彼女の琥珀の双眸には、期待一杯のきらきらの光が乱舞していたりした。
なにしろ、前振りが『一国の運命を変える恋』なのだ。
その瞬間に起こった奇蹟ゆえに、思いもかけないほどの更なるなにかが起こったに違いないと、彼女が思ったのは、本当に自然なことだった。
彼女としては、期待していたのだ。

そのとき奇蹟が起こり、当時の王朝と次代の柱神とその親族が、仲良く手を取り合ったのだと――そんな事例も、例外的にとはいえ、あるにちがいないのだ、と。

しかし、語り手であるファティ・リンシャは……ある意味、容赦なかった。

「生憎、そこまで劇的な変化はもたらされなかったというのが本当のところね。何事も一足飛びには解決できないわ。無理にそうしようと思ったら、逆に抵抗を受けるだけだというのいい教えかもしれないわ」

それを聞いたナルレイシアの心境は、まさに『がっかり』だった。

「でも……じゃあ、運命を変えたって、どういう意味なんですか？　王朝が交代したというのなら、結局内乱が起こったという話にはなりませんか？」

「ええ」

と、ファティ・リンシャはうなずいた。

「その通り。内乱は確かに起こり、多くの血が流されたことは事実よ。でもね、それまでの王朝交代では決してあり得なかったことが起こったことも本当なの。我が身を挺してガジェスを庇ったクラン姫もろとも斬ることは、王子にはできなかった……。

その結果、後にガジェスが、真実次代と認定され、王家が交代することになってしまったわけだけれど。いいこと、ナーシア？　確かに内乱は起こり、多くのひとの血が流れはしたけれど、ガジェスはクランとの恋のおかげで、伴侶と決めた彼女だけではなく、その血を濃く引く血族の一部とはいえ、守るための決断を下したのよ」

ファティ・リンシャの言葉は曖昧で、ナルレイシアは首を傾げずにはいられなかった。

そんな彼女に、隣に座っていたスカルトードが耳打ちする。

「交代を終えた王家の主が、まず最初になしてきたことは、前王家の継承権を持つ人間の完全抹殺だったんですよ。どこかしらで血縁関係が結ばれているこの国では、せいぜい二代遡っての皆殺しだったらしいのですが、全くの新王朝を興した他国の王のなかには、七代までも遡り、前王家に連なる人間　悉くを抹殺したと聞いたことがあります」

「七代!?」

聞いた瞬間、ナルレイシアは背筋が凍るような恐怖を覚えた。

それは、どれほどの人数になるというのか――考えたくもない。

「そんな酷いことが……」

本当にあったなどとは信じたくない――呆然とした彼女に、ファティ・リンシャはやさしく諭す声でこう告げたのだ。

「そう。そんな蛮行という言葉でさえ足りない行為を、ガジェスは愛する妻やその血族を守るために、止めたのです。彼以前に選ばれた……暗黒時代以降の柱神の誰も思いつかなかったやり方で。おかげで、それ以降、多くの柱神や新たに柱神に選ばれた方々が、彼に倣ったことによって、確実に流血は減ったという話です」

政治系の話は、はっきりいってナルレイシアには関心のない分野のものだった。おまけに、血なまぐさそうな話題満タンっぽいとなれば、即座に逃げ出したいところだったのだが。どうしても気になることがあるわけだ。

「ええっとー。つまり、その人の……あ、柱神さまの決断でもって、大多数のひとの運命が変わったってことなんですよね？」

いったい、なにが？

素朴な疑問に、ファティ・リンシャはにこやかに答えた。

「彼は、新王朝を興した王に、妻を含む前の王家の血を引く女性に手を出すつもりなら、自分は国を出て、決して見つからない場所に隠遁すると告げたのですよ。そんなことになれば、柱神大事で穏やかな気候を保ってくれている精霊たちも立ち去ることになりますからね、国王としてもうなずかざるを得なかったというわけです。柱神は俗世に関わり合いを持ってはならないという強すぎる思い込みに縛られていたそれまでの方々は、なるほどと納得されたという話ですよ」

心底感心したように語るファティ・リンシャに、ナルレイシアはしかし、素直にうなずけないものを感じ、口を挟んだ。

「あのう……それって、脅迫って言うんじゃ……」

暗黒時代以降、世界の大部分の土地は精霊の恵みを失い荒廃したという事実を鑑みるだに、ガジェスの言葉は脅し以外の何物でもなかった。

「まあ、ナーシアったらとんでもないことを。神の眷属とはいえ、柱神にはひとであったころの記憶もあるのですよ。愛するひとや、罪のないひとたちが殺される姿な

ど、見たくはないでしょう。だから、彼はその思いを、ただ正直に王に告げただけなのですよ。あまりに深い悲しみの記憶だけを呼び起こすような場所に住みつづけることはできないでしょう……と」

全然脅しなんかじゃないでしょう？

問いかけられ、ナルレイシアが答えに窮したのは言うまでもない。

（どう考えても脅迫としか思えないんだけど……でも、確かに前の王家の王女で、しかも神の娘だと広く知られている方を、なにがなんでも守ろうと思ったら、できることなんて限られてくるわよね……）

全面肯定は憚られる——けれど、理解はできる上に、心情的には「いい手だったかも」とさえ思いはじめたナルレイシアの心中を、正確に読み取ったらしい老婦人は、だめ押しとばかりにこうつづけた。

「恋とは不思議なものですね。クラン姫に出会わなければ、ガジェスは自然科学にしか興味を持てない風変わりな人間としての生を全うするか、風変わりな柱神として、人間に興味を覚えぬ長い時を過ごすことだったでしょう。けれど彼は現実にクラン姫

と出会いました。そうして彼は多くのことを学び、かけがえのないものがあることを、心に刻みました。その経験と心に刻んだ思いの襞は、かけがえのないものだとわたくしは思いますよ」

その言葉に、ナルレイシアの心は震えた――ロマンスモード全開の代物ではなかったにしろ。

ナルレイシアはこう考えた。

（そうよ！　柱神さまだって、もともとは人間なんだから……もしかしたら、神様に生まれ変わったときに、どこか違うように変わるかもしれないけど、でもでも根っこが人間である限り、まるっきり変わっちゃうってわけではないんだから、相互理解だって、きっと可能よね!?　しかも、恋する一念とはいっても、そんな反則技持ち出すひとだって、昔いたんだっていうのなら。悲劇を繰り返さない方法だって、きっと見つかるはず！）

劇的且つ浪漫的な話に目がないものの、現実には、この国――ディエーンの『空』を支える、次代柱神を正確に選定する役目を背負わされた少女は、生来の聡明さのせ

いで、あれこれぐるぐる渦巻いていたものが片づいた気楽さで、「よーし、頑張るぞ！」と気炎を上げた。

客が帰った庭のテラスで、アマンシールはらしくもない愚痴をこぼした。
「なぜ、あんな彼女の楽観的想像の翼の羽ばたく状況を選んだわけですか」
「必要だったからよ」
と、ファティ・リンシャは言い放った。
「あなたが無知だったころと同じように」
断言され、現在ディエーンの空間を支える柱神は口ごもった。
彼の名はガジェストリオ・アマンシール・アルス・ファラスース。
先程ファティ・リンシャが披露した恋物語の主役だった。

天を支える者

古戀唄（いにしえこいうた）

プロローグ

ガジェストリオ・アマンシール・アルス・ファラスースと名付けられた少年の、幼少期の記録はほとんど残されてはいない。

生家こそ、大国ディエーンでも屈指の名門ファラスース侯爵家であったものの、彼はその強大な権力を受け継ぐ第一子でも、その兄を補佐し、また兄に万が一のことがあった場合、その座を受け継ぐ第二子でも、さらには兄ふたりを押し退けてでも後を継ごうという野心や覇気を放つ子供でもなかったからである。

彼のそのころの言動を知るには、十数年後、彼の立場が大きく変化した際に、知り合い達が口にした追従に満ちた言葉か、思わず洩らしてしまった不敬の言葉かのどちらかを頼りにするしかない。

前者か後者か……どちらの信頼度が高いかは、言うまでもない。
しかし、彼がいまの立場にたってしまったこの状況で、その証言の記述を正確に繰り返すのにはただならぬ勇気が必要であることは確かなこと。
結果的に、それらの言葉はほとんど記述として残されることはなかった。
……幸いである。

ファラスース侯領最大の街ダランジェイド――。
その街の北西――峻厳で以て知られるアディアド連山を背後に控える場所に、広大なる敷地を誇る屋敷が建てられている。
いや、歴史を感じさせる重厚な造りのそれは、屋敷というより要塞を兼ねる城といったほうが相応しいかもしれない。
事実、過去何度となく、それとしての役割をはたしてきた建物の放つ気は、王都ロ

スタロイドにおける貴族の別邸のそれとは明らかに違う。まかり間違っても、豪華だとか洗練されているとか雅びやかだとか――そうした貴族的な表現は当てはまらないものだった。

そして、そんな屋敷の主たる人物も、都風の『洒落た』風貌の主ではなかった。筋骨たくましいという感じでこそないが、過不足ない筋肉に包まれた肉体は、四十歳という年齢を感じさせないほどに若々しく、彼の日々の鍛練を物語っていた。黒髪に灰色の瞳を持つ、どちらかといえば平凡な顔だちの彼は、しかし自らを律することを知るその精神のありようと、これまでに培ってきたさまざまな経験によって、非常に印象的なものとなっていた。

自らの顔に責任を持てる者だけが纏える気、とでも呼ぶべきものを、彼――ファラスース侯爵リュシアンドは備えていた。

それでいて、決してそれは相手の警戒心を刺激するものではないのだ。

ディエーンの外交を一手に引き受けていると言われる人物はしかし、幼い息子を前にして、普段の姿を知る者が見たら「あの侯爵が」と、揃って意外に思うに違いない

表情をたたえていた。

「王立学院？」

唖然、呆然とするファラスース侯爵の顔など――世の中の人間のほとんどが想像できないに違いない。

しかし、そんな顔を引き出した当人は、至極大まじめにうなずいたのである。

ちなみに、リュシアンドの正面に立っているのは、十歳になったばかりの彼の三男坊である。

「はい、父上」

礼儀正しく応じた子供は、頭から「駄目だ」といわれなかったことで、自らの望みが「とんでもない」ことではなかったのだと思ったのか、きらきらと双眸を輝かせてこう続けた。

「わたしは是非、王立学院に進みたいのです」

ファラスース侯爵家始まって以来……否、王立学院ですらここ数百年なかった珍事に、リュシアンドはしばし頭を抱えた。

前代未聞（ぜんだいみもん）のことだった。

一

（空の色が違う……）

王都ロスタロイドを訪れたアマンシール少年十歳――間もなく十一歳――の抱いた第一印象はそれだった。

生まれ育ったダランジェイドより南に位置しているのだから、当然といえば当然かもしれないが、故郷よりはるかに鮮やかな空の色に、アマンシールの心は揺さぶられた。

（土地が違うだけで空の色さえ違うだなんて……ああ、世界ってやっぱり謎だらけだ）

子供の特権で、未知の物事を歓喜とともに受け入れる少年を、渋面で見つめるのは

その父親であるファラスース侯爵だった。

その機嫌は……大変に悪い。

子を持つ親としては無理からぬことだった。

なぜなら、彼の三男が望んだ進路は、彼自身が望まぬ上に、障害ばかりが立ちふさがる代物だったのだから。

アマンシールが希望した『王立学院』とは、開院当時こそ、王侯貴族のための教育機関としての意味合いが強かったものの、世界が半壊した暗黒期以降、高度な学問に触れる機会に恵まれない、貴族階級にない子供たちのためにも開かれた結果、才能重視の学生にとって代わられた教育組織だった。

暗黒時代の終焉とともに、神聖学都崩壊の事実を受け入れ、王立という名の下、各国の王立学院に王族や貴族の子弟が揃って入学したという話だが、ある意味ぬるま湯のなかで育ってきたような王侯貴族の子弟たちは、王立学院への入学をして、これが唯一にして最後の機会だと見なし、必死に努力する市井出身の子供たちに、成績面において遅れをとる者が少なからずいたのである。

しかもその事実を認めることに耐えられない者が大半を占めたという。名門の出自にあくまで拘ったそうした者たちは、偉大なる先祖を持たぬ者に劣っていることが我慢できず、次々と学院から籍を抜いて行ったのだとか。

望めばどんな高名な教師さえ個人的に招聘できる立場にある家門の子供たちの持つ、高すぎる矜持は、王家の慈悲でもって学ぶことを許されただけの市井の子供たちが示す優秀さを受け入れることができなかったのだ。

結果として、王立学院は、貴族階級によるコネや贔屓の存在しない組織として再生を果たしたわけであり、ここ百年ほど安泰な状況が続いてきたというわけだ。

早い話が、才能ある平民出身の子供たちに、学業的に劣ることを認めたくない貴族の子弟は悉くその場を離れ、代を重ねるうちに、両親や親族が勝手に気を回した結果、いつのまにかすっかり貴族のいなくなったそこは、才に自信はあれど、つてやコネのない、学究心や野心に満ちた平民専門の教育組織となったのだ。

学院の輩出する官吏の出来はすこぶるよかった。

ともすれば、行き過ぎた親馬鹿の愛情ゆえに身代を潰す貴族も少なくはないなか

で、この大国の機能が失われなかったのは、彼ら学院出身の能吏によるところは小さくはない。

そういった意味で、リュシアンドは充分すぎるほどに王立学院の存在意義とその価値を認めてはいたのだが……そこに自分の息子が入学を希望したというのでは、話が違ってきた。

栄えあるファラスース家の子息が、いまではほとんど——王族に生まれた者は、形ばかりの名誉学籍を与えられてはいるものの——平民専門と見なされている教育機関に籍を置くとはなにごとだ……という単純な問題であれば、まだしもよかった。

アマンシールが反抗期ゆえに、わざとファラスース家が困るような進路を言い出したのだとしても……まだましだったろう。

しかし、リュシアンドの三番目の息子は、どこまでも真面目に誠実に、王立学院への入学を希望したのだ。

あの運命の日のことを思い出すと、いまでも頭痛を禁じ得ない。

大抵の人物からは温和と評されるリュシアンドが、彼にはごくごく珍しい、眉間に

縦皺などというものを寄せて、思い出すのは目の前の子供から、突拍子もない希望をつきつけられた日の午後のことだった。

蒼天が落ちてくるかと思うほどに、それは衝撃的なできごとだったのだ。

「王立学院……」

呆然とつぶやいたリュシアンドがまず真っ先に疑ったのは、自らの耳だった。

「王立学院、と言ったのか？」

聞き間違いであってくれとの願いも虚しく、『少々風変わりだが、三男坊だから大勢に影響もなかろうから好きにさせておくか』との認識で放っておいた子供は、それはもう期待に目をきらきらと輝かせて「はい！」と、力強く答えたものだ。

「いったいどういう風の吹き回しだ？　あれだけ、わたしが手配した家庭教師の授業を放棄しながら、いまさら学びたいなどと……それも、よりにもよって王立学院だ

と!?　今更ながらに政治への興味を覚えたとでもいうつもりか!?」

まずあり得なかろうとの予想の元、彼が放った問いは、はたして否定された。

「いいえ、そんなつもりはありません」

はっきりきっぱりとしたその返答に、一部安堵しつつも、現王家における重鎮の座にある家に生まれた男児とも思えぬ態度に、リュシアンドは頭痛を覚えた。

「では、経済にか？」

これも空振りだった。

十歳になったばかりの三男坊は晴れやかにかぶりをふった。

「いいえ、全然興味はありません」

自分の三番目の息子が、代々政治や経済に特出した才能を誇る一族のなかにあり、異端と言える気質の持ち主であることはリュシアンドも知っていた。

どれほど優秀な教師をつけようと、自らが興味を覚えたことにしか向学意欲を向けようとしない頑固な態度を、幼いころから貫き通すアマンシールの性情は、もはやこの時点で、匙を投げるしかないほどに強固なものであることが判明していたのだ。

そんな筋金入りの強情な息子が、なぜ、よりによって『王立学院』への入学だけを、強固に望んだのか――それがわからない。

外交の達人として、内外に名を馳せている彼としては、まずありえないことに、我が子の真意を未だ見抜けずにいるという苛立ちに支配されていたのだ。

「ならば、なぜ、王立学院なんだ!?」

思わず問いかけたリュシアンドに、なにやらほっとしたような顔で、アマンシールが答えたのは次の瞬間だった。

「自然科学を、しっかりと学びたいのです」

幼い息子の言葉に、しかしリュシアンドは咄嗟に反応できなかった。

「……自然、科学……？」

「はい」

「それはつまり、お前がよく守役を困らせている土いじりとか……？」

「土壌の改良は、これから必要になると思います。うちの庭師たちは、うちの庭に植えられた花や木々のために一所懸命土壌に取り組んでいますけど、野菜を視野に入れ

て考えたら、きっと、もっと色々なことができると思います。収穫量が増えれば、価格も安定するし、保存の効く穀物や芋類を大量に備蓄しておくこともできるでしょう？　冷害や旱魃に対する備えも、少しは充実すると思うんです」

十歳の子供の発言とも思えない。

リュシアンドはつくづく、目の前の息子の才能とその興味範囲を呪った。

アマンシールは明らかに、統治者として必要不可欠の視野の広さと先見の力を持っている。だが、それはあくまで自身が関心を抱いた事象にしか働かない代物なのだ。

「あと、動物生態学も、是非学びたいんです。それから天文学と、物理学と、気象学と化学でしょ……えー、と、あと植物は勿論だし、地質学も……」

可能な限り網羅したいところなんですけど、ある程度は深く知らないと、現状打開は無理そうだから、そうなるといくつかに絞るしかないんですよね――。

どこまでも子供離れした言葉を口にするアマンシールは、しかし……どこまでもリュシアンドの期待からは外れまくった希望しか抱いていなかった。

領民の生活の安定をはかるため、土壌の改良を考えることはよし。その前提として

の地質学に興味を抱くのもよし。さらには土壌改良のための化学の知識も必要だろう。

しかし、なぜそこから先の問題には、一片の興味さえ示そうとしないのか。

（この息子が政治や経済に興味を示してくれたなら……）

次代のファラスースは、どれだけか繁栄するともしれないというのに――。

そんな思いを押し隠したまま、リュシアンドは息子に問いかけた。

「なるほど……自然科学、か。確かにお前の知りたがっている事柄全般を学ぶとなると、個人教師では無理が生じるのはわかるが……なぜ、王立学院なんだ!?　神学院で学ぶという道もあったはずだぞ!?」

神学院とは、虹神七神殿が主催する教育機関だ。

王立学院と違い、そのほとんどの生徒は王侯貴族の子弟で占められている。ファラスース家の子息であるアマンシールにとっては、王立学院より、格段に波風の立たない進路であるはずなのだが……聞いた瞬間、少年は一言の元言い切った。

「絶対、無理です。二の兄上から少し聞いただけで充分わかりました。あそこは、わ

たしには合いません。入学と同時に派閥戦線突入だとか、間違って負け組に与したら、起死回生のために鵜の目鷹の目で機会を探るとか、相手の弱みを探るためにあれこれ策を弄するとか……どう考えても無理です。向いてません」

きっぱりと言い切るアマンシールの口調に迷いはなかった。

確かに、貴族出身の次男や三男に生まれた男児たちが集う神学院は、神殿同様派閥争いが激しく、駆け引きや策略に長けていなければ生き抜いていくことは難しいとされている。

そうしたことにとんと無関心なアマンシールにとって、過ごしやすい毎日が待っているとは言い難い。

「だがな……」

それは、王立学院でも似たり寄ったりだぞ——と、リュシアンドがつづける前に、少年は告げたのだ。

「せっかく二の兄上がうまくやってらっしゃるのに、わたしがヘマをして、兄上にまで迷惑がかかるようなことになったら申し訳なさすぎます」

兄に迷惑をかけたくはない――という殊勝な言葉に聞こえないではなかったが、なにやら別の意味合いがあるように思えてならないのは気の回しすぎというものか……。

しかし、そんなリュシアンドの引っ掛かりをさらに大きくするようなことをアマンシールはつづけた。

「その点、王立学院なら、わたしがなにか失敗しても迷惑をかけるひとはいないわけですから、退校にならないよう、最低限の注意さえ怠らなければいいわけでしょう？　断然、そっちのほうが楽です」

つまり、神学院では、兄に迷惑をかけないよう、余計な気配りをしなくてはならないから、そんな心配のいらない王立学院に進みたい――と、そういうわけらしい。

異様に頭が回るくせに、とことん自分のやりたいことしかやろうとしないこの性格――。

これでは確かに、いくら頭の中身が優秀でも、ファラスース侯爵家の柱とはなり得ない。

しかし。

しかしである。

よりにもよって、国内屈指の権門たるファラスース家の嫡出子が敢えて王立学院入学を志望するということには、多大な意味が付随する。

アマンシールの本心がどこにあろうと、傍からはそれがファラスース侯爵リュシアンドの意向としか受け止められないという事実がそれだ。

そのことを指摘した父に、十歳の子供はにっこり笑い、こう答えた。

「心配いりませんよ。だって、わたしは好きなこと以外やる気ありませんから……政治向きのことで人目を集めたりしなければ、問題はないわけでしょう?」

自信満々に告げる彼の根拠を、悲しいことに、父親であるリュシアンドは熟知していた。

興味のひとかけらも持てない、とアマンシールが主張する……いわゆる政治学や経済学における彼の成績は、実に惨憺たるものだったからだ。初歩の初歩たる内容にも拘らず、ファラスースの家格にふさわしい、選び抜かれた優秀な教師がこぞって空高

く匙を放り投げたわけなのだから。

「だから、貴族の子供としては目立ってしまうかもしれませんけど、それ以外のところで注目されて目の敵にされたりすることは絶対ありませんから、絶対大丈夫です」

晴々とした顔で、そう告げたアマンシールが、バランスの悪い子供に過ぎないことを、その言葉で思い知らされたリュシアンドの気分は限りなく暗かった。

だが、教えない限り、息子が認識を改めないだろうこともわかっていたので、結局は折れた。

諦めさせるため——だった。

「だが、王立学院は官吏の育成を目的に運営されている組織だからな、入試は勿論、入学が果たせたあとでも、政治と経済は最低取得単位としついてくるぞ？　はっきり言って、いまのお前では入試合格も無理だろう」

だからさっさと諦めろ——というつもりだったのだが、王立学院の自然科学に関する教授陣に、すっかり心を奪われてしまったらしいアマンシールは、二昼夜悩んだ後、覚悟を決めた。

大好きなおやつ――自然科学を思う存分学ぶ許可――をもらうため、一所懸命好きでもない政治経済の知識を詰め込み、王立学院入試に挑んだというわけだ。

まあ、世の中、そうそう自分の思い通りにならないこともあると、知ることも悪くはなかろうと、受験を認めたのが……間違いだった。

リュシアンドがアマンシールに指摘したとき、すでに受験申し込みの締め切り一月前のことだった。

受験日の、実に三カ月前のこと。

合わせても四月程度の時間で、どれほどのことができるというのか。

そうした事情があったからこそ、リュシアンドは息子の王立学院入試を認めたのだ――万が一にも合格することなどないと信じたからこそのことだった。

ついでに言うなら、その生来の悪筆ぶりの欠点も言っておいた。

「こんな字の汚さでは、正解か不正解か判別不能だろうな」

と――。

そこまでやれば大丈夫だろうと思っていたにも拘らず……。

しかし――誤算は起こってしまった。
その事実ゆえに、いま、リュシアンドの表情はどこまでも険しい。
三番目の息子の、荒唐無稽にしか思えない願いを聞いたあの日から一年足らず――。
彼は息子を伴い、王都へ向かっていた。
あり得ないはずの事態が生じてしまったからである。
あろうことかなかろうことか……馬の鼻先に人参効果でか――リュシアンドとしては、結果とは一朝一夕にあがるものではなく、日々のつみ重ねこそが重要であると言いたかったし、そう教えるつもりだったというのに――リュシアンドの指摘を受けて、自らの不足分を自覚した彼の三番目の息子は、見事入試を勝ち抜いてしまったのだ。

2

王都ロスタロイド――空の色さえ故郷とはまったく違うその街の中心に建てられた王宮は、アマンシールにとって理想郷だった。

正確に言えば、宮殿そのものがではなく、広大な敷地のかなりの部分を占める庭が、であったが。

ほとんど二百年ぶりの大貴族出身の王立学院入学希望者である彼は、本人の想像を大きく裏切り、宮中においてたいそうな噂になったらしく、それは王の耳にまで達してしまったのだ。

そうして、入試に合格した途端、彼は父に引きずられるようにロスタロイドに連れて来られ――本来ならもう少し、準備期間が与えられるはずなのだが――さらには王

宮に同行させられる羽目になった。

評判の、風変わりな侯爵家の三男坊を見てみたいと、王が望んだからである。

「わたしは珍獣ですか」

不満もあらわに抗議した彼に、父は冷たく言い切った。

「大差ない」

と。

「こうなることは目に見えていたから、やめるように言ったのだ。それを悉く無視したのはお前だろう。言っておくが、ファラスースの変わり種として、これからもずっと注目されることは間違いないぞ。珍獣扱いされたくないのなら、いまからでも進路を変えることだな。土壌改良がやりたいのなら、専門の教師を捜してやってもいい」

父であるファラスース侯爵の口調は、多分に挑発的だった。

さらには唆す響きまで上乗せしている——質が悪いことこの上なかった。

父がさんざん、王立学院入学に反対していたことを思い出し、ようやくの思いで心を落ち着けたアマンシールは、しかしそうなると、父のいうところの珍獣扱いに我慢

せざるを得ない状況を受け入れるしかない事実に行き当たった。

ファラスース家にとって都合のいい教師に学んで、外からの好奇心や敵意といった嵐から身を守るか、あるいは面倒くさい周囲からの好奇心や敵意に晒されながら、それでも望む道を選ぶのか――。

選ぶまでもなかった。

少なくとも、そのときアマンシールはそう考えた。

知りたいのは、より広く深い世界だ。

ならば、多少の茶々が入った程度で諦めるわけにはいかない。

父親の「さっさと馬鹿な真似はやめろ」攻撃に反発していたことも確かで、彼はきっ、と眦をつり上げ、「やめません」と宣言した。

そうした成り行きで、父に連れられ、王宮を訪れ、国王陛下と対面を果たしたわけなのだけれど……どうでもいいと思っていたせいか、そのときの記憶はほとんどなかった。

というか、その後、父に追い払われるように「しばらく庭でも散策してくるとい

い」と告げられ、邪魔だから出て行けとばかりの態度に、目茶苦茶腹を立てたことまでは覚えているのだけれど……しかし。

追いやられたその先は、まさに楽園としか呼びようのない世界だったのだ。

図鑑でしか見たことのない珍しい植物があった。

ふらふらと近づいてみれば、そのそばに、またしても図鑑でしか……その二が。

さらに周囲を注意深く見てみれば、あそこにもここにも、本来このあたりの地には生息しているはずのない植物が！

「うわぁぁ！」

アマンシールは夢中になった。

「あそこにも！」

「え、うそ!?　あっちにも!?」

こうなってしまっては、先程までの面倒なできごとなど遥か雲の彼方――だった。

「うわ、なんて大きなシダなんだ!?　両手で抱え込むこともできないじゃないか！」

ダランジェイドでは目にしたこともない、巨大なシダに目をきらきらさせ――。

「これはええっと、ウコンかな？　春ウコンかな、秋ウコンかな？　図鑑で見ただけじゃわからないな」

実物を見て知る必要をひしひしと感じ取りもし――。

「あ、これは知ってる……石垣竜胆だ！」

蔦のように地を這い、小さな可憐な紫色の花を咲かせる植物を見つけた途端、叫んだアマンシールは、すぐに違和感を覚えた。

いまは、晩夏から初秋にさしかかるころであることを思い出したのだ。

石垣竜胆は春に咲く花――季節的に……おかしい。

狂い咲きかとも思ったが、その周辺で幾株もの石垣竜胆が花をつけているのを見てしまえば、単純にそうとも片づけられない上に、別の箇所で夏から秋にかけて開花する芙蓉の花を発見してしまったとなれば……もはや、この庭の異常性に気づかざるをえなかった。

この事態にぶつかって初めて、アマンシールは柱神という存在を思い出した。

それは、世界の天と地との間――『空』を支える、神の眷属。



自分が生まれ育ったディエーンが、そんな彼らの守護を得ており、だからこそそうではない他国に比べ豊かな生活を保証されているのだとは、確かに聞いていた。

その最たる理由が、柱神に対する精霊たちの好意であることもだ。

しかし、ここまでたらめな生態系を実現するほどに、桁外れな好意で守られているとは……想像もつかなかった。

生息地域も季節も無視した……否、無視できるほどの精霊の加護。

それは果たして正しいことと言えるのだろうか――。

(まあ、わたしだって、冬の寒さは苦手だから、できれば冬でも暖かく過ごせればいいなー、とかは思ってしまうけれど……)

だが、ここは……この庭は、なにかが、どこかが違うのではないのか、と思わずにはいられなかった。

もっとも、この王宮に不自然に生息している植物のことは、可能な限り観察、研究したいとは思ったわけだが。

(ここでなら、精霊のおかげで、本来なら実物を目にする機会もない植物……あ、も

しかしたら動物も観察できるかもしれないんだ）

むら……むらむらと、この土地に対する好奇心が育ってくるのを自覚するアマンシールだった。

だが、その機会がこの一度きりであることもわかっている――ファラスース侯爵という父の庇護と力がなければ、こんなとんでもない場所への出入りが許されたはずもないのだから。

（つまるところ……また、ここに来たければ、それを許されるに足る実績を示せってわけなのか？　父上、もしかして、こっちの弱みにつけこんで、うまいこと操ろうとしてる、とか？）

頭ぐるぐるになりかけていたアマンシールは、自らの眉間を指で軽く突いた。

これは、彼が冷静さを取り戻すためのお呪いだった。

なぜ効くのかはわからないが、こうすることで落ち着くことを知って以来、ずっと癖になった仕種だった。

そうして、いつもどおり、なんとか落ち着きを取り戻したアマンシールは、周囲を

見渡した際、別の意味で困惑してしまった。

「……まずい」

つぶやく声は自嘲の響きを孕んでいた。

周囲を埋めつくすのは、緑——また緑。

先程まで歩いていたはずの、散策用の小道が……見えない。

理由は簡単この上ない。

珍しい植物に釣られて、釣られて、釣られまくった挙げ句、道を外れて広大な王宮の庭で迷子になってしまったのだ！

「まずい……まずすぎる……！」

先程とは違う焦りに支配され、アマンシールは狼狽した。

実のところ、彼は故郷であるダランジェイドにあっても、迷子になる達人（!?）として有名な子供だった。

見たことのない植物や動物を目にした途端、人魚の歌声に誘われる船乗りよろしく、ふらふらーとそちらに足を踏み込んでしまい、結果的に迷子になってしまうとい

う悪癖があったからだ。

ひどい時には、ファラスース家の家人が十日間、昼夜を問わず彼を捜して駆けずり回ったこともあるぐらいだ。

本人は、培った知識で以て、そこらに自生している野草や芋や木々の新芽を調理して食べ、さしたる不自由を覚えなかったおかげで、その悪癖が改善されることはなく、すっかり野営の達人と化してしまったアマンシールは、そのことに対して危機感を抱いたりはしなかったが、そのことを率直に父や兄たちに告げたところ、大目玉を食らった。

『心配している人間のことを考えろ！』

そうして、きつく言い含められた。

『いいか!?　たとえお前が結果的に無事だったとしても、お前がふらふら迷子になることで、寝食を忘れてお前の行方を探す者たちに負担がかかることを忘れるな！　お前が呑気に野外生活を満喫している瞬間にも、彼らは血眼になってお前を捜しているんだ。それを絶対に、決して忘れるな。ことによっては、それで命を落とす人間が出

るかもしれないんだからな！』

おまえは、それだけの責任を負っているのだ――それに見合う行動を執れ。

長兄に告げられた言葉ゆえに、周囲への気遣いを覚え、以降失敗することはほとんどなくなったが……今回ばかりは、してしまった。

大失敗だ。

「し、しまった……」

思わず洩らしたつぶやきは、彼にしては非常に珍しいことに、本気で困った響きを宿していた。

なぜといえば、彼は王宮を訪れる際、父であるリュシアンドにきつく言い含められたことがあったからである。

三番目の息子の行状に関しては、すでに匙を投げかけている侯爵が、しかしこのことばかりは真剣な面持ちで告げたのだ――王宮では決して迷子になるな、と。

いつもなら、「わたしだって、好きで迷子になってるわけではありません」ぐらいのことは言い返すアマンシールだが、このときだけは神妙にうなずくしかなかった。

なにしろ、父は絶対無敵の切り札を握っていたのだから。
リュシアンドは息子にこう言った。
『もし、王宮を騒がすような真似をしてみろ。王立学院入学は取り消し、ダランジェイドの屋敷で一生暮らさせてやるからな』
と――。
父は限りなく本気だった。そのことがわかっているから、アマンシールの焦りは大きい。
「どうしよう……」
眉間を指でとんとん、とつつきながら、彼は大まじめに思案した。

その呑気な性格ゆえに、長兄や次兄に「とても血の繋がった弟とは思えない」と何度となく言われてきたアマンシールではあったが、王立学院入学がかかっているとあ

っては、真剣にならざるを得なかった。

なにしろ、入学試験に合格するために、好きでもない政治や経済の入門書を頭に詰めこみ、さらには大の苦手の手習いに——文字など自分が読めればいいという主義を曲げて——かなりの時間を費やしたのだ。

王立学院で自然科学三昧という、この上なく甘美な餌なくしては、決してやり遂げられなかったに違いない苦行の日々を、無駄にしてなるものか。

確固たる決意を胸に抱いたアマンシールがこの時考えた解決策は、実に簡単なことだった。

迷子になった事実は消せない。

しかし、そのことを誰にも知られなければ、なかったことにできる——というものだった。

(要は、父上の耳に届くような騒ぎにさえならなければいいんだ。早いところ、道を見つけて、そのまま進めば、山じゃないんだから、きっとどこかの宮にはたどりつけるはずなんだし、そうしたら、ひともいるはずだから、初めての王宮で迷ってしまい

ましたって正直に言えばいいんだよな）

父が危惧しているのは、迷子になったあげく、王宮総出の大捜索になることだろうから――確かにそうなっては、かなりどころでなく外聞が悪いことはアマンシールにもわかる――そうなる前に本殿に戻れば、なんの問題もないはずだ。

そうと決まれば話は早い――さっさと散策用の小道を見つければいいのだ。

ここは王宮、いかに広かろうと、遭難する危険はないはず――と、勇んで歩き始めたアマンシールは、自身の致命的な欠点を完全に失念していた。

……彼は、実は途方もない方向音痴だったのだ。

すぐに見つかるはずの小道を求め、歩いて歩いて……ほぼ半時。

さすがにアマンシールも、自分が明るく開けた場所ではない場所に入りこんでしまったらしいことに気がついた。

広いとはいっても、王宮の敷地内のこと、限りはあると思っていた彼に罪はない。だが、王宮の庭園で彼が感じた違和感の正体を、もっと深く考えていれば、この事態は避けられたかもしれないのも事実だった。

そこは、王宮であると同時に、当代柱神である人物の屋敷をも内包する空間だった。

精霊たちの祝福を受けた土地は、豊かさと同時に不思議な力を帯びるのだ。

招かれざる来訪者は、永遠にかのひとの屋敷に近づくことはできず、近辺をさまよいつづけることとなる。

アマンシールは知らなかったが、実はディエーンの王宮の庭とは、道を逸れたが最後、遭難してもおかしくはない危険地帯だった。ファラスース侯爵リュシアンドは、そのことを知るからこそ、しつこいまでに息子に念押ししたのである。

しかし、最早いまさら……の事態である。

そのことを、アマンシール自身、なんとなくではあるが感じはじめていた。

「どう考えたって、こんなのあり得ないよなー。可能性としては、同じとこをぐるぐ

る回ってるってことだけど、一応目印つけてきたのに、全然見かけないから、その線もなさそうだし……さっきまでは太陽が見えてたから、それを頼りに歩けたのに、こんな鬱蒼とした森のなかじゃ、太陽の位置さえわからないし……」

大体、なんだって王宮の庭のなかに、こんな空もよく見えない森があるんだ――ぶつくさと文句を垂れる少年の顔には、濃い焦りの色が現れはじめていた。

理由は、このままでは自分がどうなってしまうのか……という不安などではなく、ただひたすら父の言葉ゆえだった。

（王宮で迷子になったら、王立学院入学取り消し……！）

もともとアマンシールの選んだ進路には、いい顔をしていなかった父のことを思うと、このままでは確実にそうなることは見えている。

しかもファラスース侯爵リュシアンドは、有言実行のひとでもある。

（このままだと、ダランジェイドの屋敷に押しこめられて、植物採集とか動物観察のための外出も禁止されて、へ、下手すると屋敷の敷地から外には出られなくなったりして……!?）

アマンシールが脳裏に浮かべた未来予想図は、彼の心を絶望で真っ黒に染める代物だった——もっとも、いま現在の自分の立場に対して、いっさい不安を抱いていないあたり、相当な胆力の主といえるかもしれないのだが。

しかし、彼にとっては想像した未来予想図のほうが大問題だったのだ。

状況もなにもかも忘れ、彼は思わず叫んでいた。

「そんな、馬鹿なことってあるか——————っっっ！」

大地をも揺るがす大絶叫だった。

そして——その瞬間、奇蹟は起こった。

「きゃあっ!?」

あり得ないことに、鬱蒼と繁る木々のさらに上から、明らかに少女のものと知れる声が聞こえてきた。

さらに続く、とんでもない不協和音。

それは、簡潔に表現するなら、飛ぶことを当たり前と思う存在がそのことを忘れてしまった結果のこと——もっとわかりやすく言うなら、飛ぶことを忘れた大鳥が地上

に落ちてきた……とでも表現すべき音、だった。
頭上の枝がばきばきと音をたて、上からなにかが落ちてくるのを、アマンシールは確かに認識した。
そして、その正体を見極めるため、目をこらしたその結果――彼が目にした存在はといえば。
それは。
「退きやと言うたであろうがっっ！　そなた、ちゃんと耳は聞こえておるのかえ!?」
怒りに顔を真っ赤にした、十に満たない少女の姿だった。
いや、正確に言えば、それは一瞬目にした印象に過ぎなかったかもしれない。
なぜといえば、次の瞬間、彼女は現実の重みを伴い、彼の背中に落下してきたからである。
感じたのは衝撃と痛みと――確かな重み。
耳に届いたのは、呆れを隠そうともしない幼い少女の声だった。
「そなた、もしかして、言葉がわからなんだのか？　それとも単に鈍いのか？」

どこまでも偉そうな口調で問いかけられ、アマンシールは数瞬絶句した。投げかけられた言葉にどう反応していいものか、迷ったこともあったが……なにより第一の理由は、押しつぶされた結果、声がでなかったのである。



3

空から降ってきた夢のような少女は、しかし生身で、しっかりと『降ってきた』だけの衝撃と現実の重みを、アマンシールの背中の上で発揮した。

一分近い絶息の後、彼がようやく口にできた言葉は――情けないことながら「お願いですから、退いてください」だった。

言われた少女も、それまで自分がなんの上に乗っているのか知らなかったらしく、「あ、これは悪かった」と謝ると同時に腰を浮かせ……しかし、次の瞬間「はう」と声にならない声を上げたかと思うと、再びアマンシールの背中に、どすんと体重を乗せてきた。

ただしそれは、先程感じた衝撃と痛みとは比べ物にならないほどに小さなものだっ

たので、アマンシールはそこで初めて、相手が自分よりずいぶん小さな子供であることを知った。

とは言っても、背中に乗られたままでは身動きが取れない。

「あのう……ちょっとずつ、体を起こしていきますから、それにあわせて地面に座り直していただけますか？」

そう言った瞬間、アマンシールは「しまったかも」と思った。

ここは王宮の庭なのだ。そこを自由に歩いている以上、背中の上に降ってきた少女は、王宮の住人である可能性が高い。

つまりは王族の令嬢ということで……異様に気位が高い性格の主である確率が……物凄く、高い。

『敷物もない地面になど座れるものか！』

と、一喝されかねない。

というか、以前ダランジェイドに遊びにきた、遠縁の公爵令嬢は、敷物がわりにアマンシールが上着を提供したにも拘らず、腰を下ろすことを拒否した。

その理由というのが「汗くさそうな上着の上に座って、匂いが移ったらイヤだから」だったと聞いて、アマンシールは怒りを覚えるより先に呆れたものだった。

そこまで強烈な記憶は一度きりだったとはいえ、高貴な女性のわがままが、こうまで理解不能な代物であると思い知らされるには充分なできごとだった。

けれど、いまの時点で上着を脱いで敷物とすることはできない。

仕方ないので、彼は相手に切々と訴える方法を選んだ。

「まことに申し訳ありませんが……」

と、口上を口にした途端のことである。

少女が、口を開いて、告げた。

「うるさい」

と。

「……はあ？」

間の抜けた声を上げたアマンシールに、相変わらず背中に乗ったままの少女は、はっきりきっぱりと言い切ったのだ。

「要は、お前の背中からおりればいいのであろう？　それくらいのこと、簡単に……簡単に……」

……どうやらできそうにないらしい。

それでも少女の重みが、少しずつとはいえ背中の上を移動していくのを感じながら、アマンシールはそれが消えるまでじっと待った。気位が高いらしい相手に、あれこれ助言することが、必ずしも事態を良くするわけではないことは学習済みだったので、ようやく自由になったとき、彼はのろのろと身を起こし——そして。

「お怪我は——」

ありませんか……とつづけるつもりだった彼は、ほとんど生まれて初めて、物理的な原因ではない絶句状態に陥った。

なんとなれば、彼はこのときようやく、降ってきた少女の顔をまともに目にしたわけであり、そしてそれは、言葉を失くすに充分なものであったからだ。

その少女の髪は葡萄を思わせる、紫がかった光沢を放つ、不思議な黒——その双眸は、極上の紫水晶。

黒髪などこのディエーンでは珍しいものではなかったし、紫の瞳も王家に近い家柄に生まれた者に何人もいる。

けれど、こんな独特な艶を持つ黒髪も、澄みきった紫の瞳も、彼はこれまで目にしたことがなかった。

さらに付け加えるなら、目の前の少女は、彼がこれまで見てきたなかで、文句なし一番の美少女だった。

年のころは六つか七つか——普通、その年頃の子供であれば、可愛いという表現が一番使われるのだろうが、彼女に関してはそれは当てはまらなかった。

どんなに幼かろうとも、彼女に『可愛らしい』という言葉は似合わない。

とはいえ、かれには詩的素養はなかった——というか、この時点では興味がなかった——ため、綺麗だとしか思えなかったのだが。

もし、この時、両者の間に横たわる沈黙が、もう少し続いていたら、彼の脳裏にもうひとつ、神秘的という言葉が浮かんだかもしれないが、生憎そうはならなかった。

それはそれは整った顔を無残にしかめて、少女が盛大に文句を言い立ててくれたか

らである。

「三度っっ！」

指を三本たてた右手を、ずい、とアマンシールの鼻先につきつけて、彼女は怒り心頭といった様子でまくしたて始めた。

「わたしは三度、忠告した！　退きや、と……邪魔だし、危ないからと！　なのにそなたときたらぼんやり突っ立ったまま身動きひとつせず……なにを考えておるのじゃ!?」

「……三度……？」

思わず真面目に記憶を反芻してみた彼は、しかしかろうじて一回分しか思い出せず——しかもそれが耳に届いたのは、すでに背中に衝撃を受けた後のことだったのだから、あれは忠告とは呼べまいと判断した結果、彼は大まじめに答えた。

「聞こえませんでした」

その言葉に、少女は一瞬驚いたように目を瞠った。

「聞こえなんだ？　そんな馬鹿なことが……さては、そなたずいぶん上の空で歩いて

おったのじゃな？　大体、こんな外れた場所にひとが入りこむなぞ、まず考えられぬことじゃ。ふむ、なにやらわかったぞ。そなたはずばり、田舎者であろう!?」

確かにあの事故の前後、迷子になったことに焦ったり、その結果父の権限で取り消されるかもしれない王立学院入学資格のことで、頭が半ば混乱していたことは否めない。

また、今回上京するまで、一度たりとも故郷のダランジェイドを出たことがないという意味では、田舎者扱いされても仕方はない。

の、だが。

（なんで、このお嬢さんは、こんなに嬉しそうなんだ？）

これが、自分のことを馬鹿にしているのなら、なんとなく空気というか、雰囲気でわかるのだが、不可解なことに、彼女は自分が田舎者であることを、心底喜んでいるように感じられてならない。

どういうことなんだろう、とアマンシールは考えた。

（黒髪と紫の瞳ってことは、まず間違いなく王族か、近い縁戚ってところだろうな）

政治的な方面に、かけらも興味を覚えていないアマンシールは、現在の王統譜などほとんど頭に入れていない。

王立学院入試に必要とし、一応は詰め込んだはずの知識は、合格の知らせを受けるや否や、彼の脳裏から霧消してしまった――世にいう一夜漬けの宿命である。

それでも考えること、推理することはできる。

（確か外れって言ったんだよな。王宮の庭の外れってことか？）

それにしては、この鬱蒼と繁る木々の陰は濃すぎるような気がしないでもないのだが。

しかし、ここが王宮の庭の一角であることは確かなのだから、きっと事情に通じた庭師以外、ほとんど誰も立ち入らない場所なのだろう。

（実際、いくら捜しても、道らしきものを見つけられなかったのは事実だし……）

となると――彼女は王宮の庭に相当馴染んでいる人物である可能性が高い。

（そういうことなら、まずこの王宮に住んでいる王族の一員である可能性が高いってことで、次に考えられるのは、住んではいないけれどご両親のどちらかから庭につい

て詳しいことを教えてもらってる縁戚の姫だって線も消せないわけで……うーん、まあ、どっちにしても敬意をもって接すれば、間違いはないってところかな）

目前にしている少女の正体が知れぬことに、一縷の不安を抱いたアマンシールではあったが、ある程度の推理ができたことで、心に余裕が生じた。

少なくとも、彼女を保護する名目であれば、彼女自身に道案内を頼んだところで後々問題とはならないはずなのだ。

（迷子になったと思ったときには、もう未来全部真っ黒に塗り潰されてお終いかと思ったけれど……そんなこと、全然ない、大丈夫じゃないかー）

よし、まだ自分の未来は閉ざされていない！

確信したアマンシールは打撲の痛みを押し退け、立ち上がると、座りこんだままの少女に手をさしのべた。

「お怪我はありませんか？」

半ば社交辞令として尋ねた彼に、紫の瞳を持つ少女は、仏頂面で答えた。

「ある」

と。

「え!?」

予想もしなかった返答に、目を瞠り、「ど、どこが……?」と狼狽えて問い返した彼の耳に届いた答えは――。

「お尻」

だった。

故郷のグランジェイドで迷子になる癖がついてしまい、結果的に野外生活の知識を蓄えたアマンシールにしても、これは大問題だった。

(お尻……お尻って言ったよな……?)

記憶を洗い直しながら、彼は空から降ってきた相手を見つめる。

確かに……間違いなく、まぎれもなく……しかも滅多に見ないほどの美少女にしか

見えない、六、七歳の子供だった。

怪我や打ち身は早急な対処が肝要――というのが、彼が迷子に迷子を繰り返した結果、得た知識ではあったのだが、相手が幼いとはいえ少女で、しかも患部がお尻とあっては……アマンシールが途方に暮れたのも、仕方のないことだった。

恐らく王族の一員に違いない少女のスカートをぺろんとめくって、当の患部を検めるわけにはいかないではないか。

しかし、本人が言う通り、お尻が痛くて立ち上がれないらしいことは確からしい。こうなったら、もう仕方がない。

「ええっと……失礼しました」

と一言言って、彼は地面に座りこんだままの少女に背を向けた格好で、跪き、両腕を後ろにのばしたのだ。

困惑したらしい、少女の声が降ってきた。

「……それは、なんのつもりじゃ？」

「あ、いえ、お尻が痛いのなら、歩くのはきついんじゃないかな……と。幸い、わた

しは姫君よりは体が大きいので、背負って運んでさしあげられるかな、と。正直なところを言うと、先程の姫君のお言葉通り、わたしは田舎者の迷子なものですから、ついでに人里……じゃない、ご存じの建物まで連れて行っていただけたらありがたく存じます。あ、それも面倒なら、方向だけでも教えていただけたら……父のおまけでくっついてきたもので、勝手に迷子になったりしたら、父に迷惑かけるうえに、罰を受けてしまうんです」

だから、どうか、一番近い建物の場所を教えてほしい——と、告げたわけだが、少女は黙ったままだった。

よもやまさか、刺客の類に間違われているのでは——と、思い至った瞬間、少女がぽつりと洩らした。

「まあ、ありえないから、いいか」

と。

なにが、どういいのか是非とも尋ねたいところだったが、そんなこちらの事情など、綺麗に無視して、少女は告げた。

「よし、その背に乗ってやる」

ただし、後に続く言葉は尋常ではなかった。

「乗ってやって、案内してやる。ただし、そこでのことは他言無用だ。約束できるか？」

とてつもなく偉そうな物言いに、アマンシールが反発しなかったといえば嘘になる。

しかしそれが小さな女の子で、精一杯の虚勢を張った結果だと、見えてしまえば、印象はいくらでも変わってくる。

「そういう場合は、誰にも言わないでくださいって、お願いするほうが通ってるんじゃないかと思うんですけど」

言った途端、少女は心底不思議そうな顔になった。

「お願い……？　わたしが、か……？」

理解不能と顔に書いた少女との、それ以上の相互理解は諦め、アマンシールはとりあえず、彼女以外の誰かがいる場所へ、案内してもらうことを選んだ。



高すぎる気位を持つ人間との対応が難しくとも、その屋敷の家人が相手なら、もう少しは楽にこなせるに違いないと思ったからだ。

「えっと……まあ、いいですから、とにかく最寄りの建物までの道案内を願えますか？　先程のお言葉に関しては、必ず守るとお約束いたしますから」

その言葉に対する少女の答えは……どこまでも偉そうだった。

「ならば、よし」

そうして、アマンシールに背負われた少女は、「そこを右」、「そこは左……曲がって十歩ぐらいのところで茂みが途切れているから、そこを分け入るようにして入って」――などなどと指示してくれた。

最初は、（これは知るひとぞ知る近道なのかな？）と思ったわけだが、指示通り進むにつれ、どんどん緑の気配が強くなっていくのを感じ、アマンシールは得体の知れない不安に見舞われることとなった。

（この子は……一体、どこに案内してくれるつもりなんだろう!?）

そう、思った瞬間のこと――。

急に視界が広がった。

広い、広い空間が、突然目の前に出現したような錯覚に見舞われた。

ほんの今の今まで、暗い森のなかを彷徨っていたと思っていたのに、瞬きをする瞬間に、世界そのものが変わってしまった。

そうとしか思えない劇的な世界の変化を、アマンシールは目の当たりにした。

「な……なにが……」

直感的に異界に入りこんでしまったことを感じ取り、困惑する彼の耳に――その声は、届いた。

「相も変わらず、不意の訪れだね、クラン？　一体今度はどうしたというんだい？」

クランと呼ばれた少女――それは、アマンシールに背負われていたのだけれど――は、すぐさま反応した。

「あいすみませぬ、当代さま。ちゃんと先触れを頼むつもりだったのですが、途中でこの者が、奇怪な大声をだしたものですから、彼らは驚いてわたしを放り出して去ってしまったのです」

（当代さま……？）

恐らく声の主を指す言葉であろうことはわかったが、不思議に距離や方向を感じられないそのひとの姿は、見えない。

つい、人影を探して、左右に視線を彷徨わせたアマンシールの耳元で、可笑しげにくすくすと笑う声が響いた。

落ち着いた、深みのある大人の女性の声だった。

なのに、相変わらず姿は見えないのだ。奇怪なことこの上ない。

（目眩ましの幻術かなにか……かな？　でも、気配ひとつ感じ取れないだなんて……）

混乱するアマンシールをよそに、少女と声の主の会話は進んでいく。

「……クラン。先触れというものは、少なくとも出かける前に出すものですよ。間違っても、来る途中で風霊についでに頼むようなものではありません。それも、初めての客を伴っての訪問であれば尚更のこと。わたくしが留守でしたら、どうするつもりだったのです？」

柔らかい声に、かすかな咎める響きがあった。

それに気づいてか、アマンシールの肩にしがみつく、少女の指が一瞬強張った。

「こ、この者は、べつに客として一緒につれてきたわけではなくて……その、風霊に放り出されて空から落ちたときにお尻を打ったもので、ちょっと……歩けなかったら、この者がおぶされと言い出したものだから……。そもそもの元凶はこの者の奇怪な大声でしたし、しきりに送ると言うものですから……」

しどろもどろに言い訳する少女の声は、段々と小さくなっていく。

しかし、姿なき声の主は、追及の手を緩めなかった。

「では、クラン。あなたは誰とも知らない人物を、ここまで案内してきたというのですか？　それは軽率な行動ではありませんか？」

きつい叱責の響きでこそなかったが、やんわりとした非難の響きは隠しようがなかった。

これは、どう考えても、クランと呼ばれた少女は、自分をここに案内してきたことで、ここ――見えないが、恐らく近くに屋敷かなにかがあるのだろう――の主に責め

られているとしか思えない。

声はすれども姿が見えないのも、恐らくは自分を警戒してのことだろうと判断したアマンシールは、意を決して声をあげた。

「あ、あの！　不用意にこの地に立ち入ったことは幾重にでもお詫びいたしますから、どうかこの方をお責めにならないでください。元はといえば、珍しい草木に心を奪われて、森のなかで迷ったわたしが悪いのですから」

途端、背負われたままの少女が慌てたように声を張り上げた。

「違う！　それは違うぞっ！　確かに、風霊たちが驚いて散じたのは、そなたの大声のせいではあったが、空から落ちたとき、そなたが真下にいてくれなんだら、さすがにわたしも大怪我を負っていたに違いないし、お尻を打って痛い思いをしたのは確かだから、そなたが背負ってくれなんだら、ここまで来るのに、もっともっと時間がかかっただろうからな！　そなただけが悪いわけではない！」

着いた当初は、全部悪いのはアマンシールだといった風なことを口にしていたはずの少女の意外な翻身に、彼は驚いて、灰色の双眸を大きく瞠った。

この、態度の変化は、いったいどういうことなのだろう？

首を傾げるアマンシールを余所に、背中の少女は今度は懸命に、姿の見えぬ『当代さま』に訴え始めた。

「当代さま！　確かにわたしが軽率でした。そのことは何度でも謝ります。ですから、どうかこの者は、無事に望む場所まで送り届けてやってくださいませ。変なやつではありますけど、決して当代さまに害をなす輩ではありません。お尻が痛いと言ったわたしを、放っておけずに背負って一時以上、歩いてここまでつれて来てくれたんです」

なぜ、こんなに少女が必死になるのかはわからなかったが、その言葉は明らかに、自分を庇うためのものだとわかったから、アマンシールも黙ってはいられなかった。

「歩けない様子の彼女を放って置けないと思ったのは本当ですけどっ！　同時に最寄りの建物に案内して貰おうと言う下心があったのも事実です！　だから、そんな褒められた動機なんかじゃありません！」

「うるさいな、お前は！　黙っておれ！」

「黙ってたら、あなたは勝手にひとのことを、美談の主に仕立てあげるでしょうがっ！」

「充分、美談の主だろうが！」

「冗談じゃない！　おれは単に、父に王宮で迷子になったことを知られる前に、本殿に戻りたかっただけです！　王宮の庭で迷子になるだなんてみっともないことをやらかしたら、せっかく決まった王立学院入学も取り消すって、あの××親父に、きつく、きつーく言い渡されたものだから……！」

だから、迷ったあの場所で、出会ったのが誰であろうと、どういう状況であろうと、最寄りの建物まで案内してもらうということは、自分の中ではすでに決定事項だったんだから、そんな風に美化されると、かえって気持ち悪いんですよ！

アマンシールが、吐き出すように告白した直後のこと――。

ぶーっっ、とどこかで、誰かが吹き出した。

それを境に、アマンシールの視界は一変した。

今の今まで、森の中の少し開けた場所にいたつもりだったというのに……なぜだ

か、瀟洒な小ぎれいな屋敷が目の前に広がっていた。
そして、眼前に、ほとんど白髪となった、けれど眉と睫毛は未だ黒々とした老婦人の姿があった。
「当代さま！」
と、背中の少女が嬉しそうに呼びかけた。
「いらっしゃい、クラン。そして」
深い、深い色をたたえる紫の双眸を、真っ直ぐにアマンシールに向けて、彼女は微笑んだ。
「ファラスース家の、風変わりな息子」
その呼びかけで、アマンシールは悟った。
この瀟洒な屋敷の女主人のその正体を。
彼女こそが、この地の『空』を支える存在――天と地との間を支える、柱神と呼ばれる存在であることを。

4

無事、入学式も終えた九の月――一の黄の日の午後、アマンシールはなぜか王宮の一室にいた。

学院での行事は午前中で終わり、午後は休みとはいえ、まだまだ慣れない生活のなか、やるべきことは山ほどあったが、王宮からの呼び出しとあっては致し方ない。

しかし、これが毎週つづくというのであれば、話は全然別のものとなり、とんでもない重荷となってしまう。

（いよいよ来週から本格的に授業が始まるというのに……まあ、今日のことはわかっていたから、前もって予習はしてたし、明日の休みもあるから、とりあえず困ることはないだろうけど）

それでも、毎週半日を、ここで過ごさなければならないのかと思うと……やはり、あまり嬉しくはなかった。

そんな彼の心中を知ってか知らずか、テーブルを挟んで、彼の正面に座る少女は、不思議そうに問いかけてくる。

「どうしたのじゃ、ガジェス？　茶が減っておらぬようじゃが……もしかして、香草茶は苦手なのか？　好きな銘柄があれば、言ってくれれば淹れさせるが？」

言いながら、たっぷりの蜂蜜を入れた香草茶を、美味しそうに口にするのは、先日王宮の庭で出会った少女――クランこと、クランクレイアだった。

「いえ、とんでもない……いただきます」

仕方なく、カップに手を伸ばし、彼は乾燥ものではない、新鮮な香草で淹れられた茶を口に運ぶ。

清々しい風味が、口一杯に広がり、その瞬間、アマンシールは少しだけ幸福感を覚えた――学院の寮では、決して望めない味わいだったのだ。

（このお茶のためだけでも、週に半日ぐらい使っても……いいや、よくない、よくな

いぞ）

うっかり味覚の誘惑に乗りそうになった心を、彼は慌てて引き締めた。

入寮してまだ間もないというのに、すでに一部の同級生から、敵意まじりの視線を投じられているのだ。それも、持参した私物が、明らかに上質であったせいで、だ。

いらぬ波風を立てないために、アマンシールがファラスース侯爵家の息子であることは、学院長了承のもと、秘められているというのに――それでも、些細なことで、反感を抱く人間は現れるのだ。

この上、週に一度、王宮に招かれ、王女の話し相手を務めていることを知られてしまったら……周囲の反感が大爆発することは目に見えている。

ここは一発、王女に早々に飽きてもらうしかない――というのが、アマンシールが熟考に熟考を重ね、導き出した結論だった。

（実際、おれはこんな役所、やりたくもないんだし、少しばかり破天荒とは言っても、相手は小さな女の子なんだし……いや、空から降ってきたり、当代さまのお屋敷に、自由に出入りが許されてるあたり、絶対普通のお姫様じゃないのはわかってるけ

ど。だけど、大事に大事に育てられた王女様だってことに変わりはないわけだから、やっぱり退屈な人間だと思ってもらって、早々にお役御免にしてもらうのが最善の策だよな）

世事に通じていないことを、家族中に認識されているアマンシールは、しかし自分の目的のためであれば、小狡く立ち回ることも知っている少年だった。

目の前の少女――クランクレイアが、単なる王族ではなく、王女だと知った瞬間に、自ら遠ざかることを選ぶ程度には。

そう、なによりも腹立たしい、その事実。

その事実さえなかったら――そう思わずにいられない。

むか。

むかむかむか。

胸に湧き起こる不愉快な感覚に、否が応でもアマンシールはあの日のことを、思い出さずにはいられなくなった。

あれは……父侯爵に連れられ、王宮を訪れてから数日後のこと。

血相を変えた父親に、襟首を掴まれ、引きずられるようにして、再び王宮の門を潜った。

父侯爵と彼の二人を呼び出したのは、国王陛下そのひとだった。

正に悪夢のひとときだった――。

治世者というものは、その場その場でたやすく、最も相応しい仮面を身に着けられるものなのかもしれない。

アマンシールが強く、そう感じたのは、国王エスライドがそのとき纏っていた空気が、最初の対面のときに感じたそれと、あまりにも違っていたせいだった。

「よく来た。よく来てくれた」

王の心底から歓迎する様子に、戸惑いと違和感を覚えたのは、アマンシールだけではなかった。

父リュシアンドが、一瞬だけだが、眉宇をひそめるのを、アマンシールは確かに目にしたのだから。

だが、父は深々と頭を垂れるだけで、追及めいた言葉を口にすることはなかった。

アマンシールももちろん、父に倣った。

不用意な発言が、どんな結果をもたらすものかは、物心ついて以来、父とふたりの兄によって、いやというほど叩きこまれていた。

はっきり言って、彼らは肉親とも思えぬほどに厳しく容赦のない教師だった——詳細を思い出すだけで、吐き気と気鬱を覚えるほどに。

だが、その厳しすぎるまでの教育もまた、無駄ではなかった……のかもしれない。

少なくとも、満面笑顔の国王が、持ち出してきた話を聞くなり、「冗談じゃありません！」などと叫びだしたりしなかったあたり。

国王は、見るからに油断の出来ぬ笑顔でもって、リュシアンドとアマンシールに、提案という形を取った命令を発した。

「そなた……アマンシール。聞いたところ、先日、王宮の庭において、我が王家きっ

てのじゃじゃ馬娘と出会ったとか」

その態度、その口調――そこにはいっさいの疑問は存在していなかった。確認する意志があるだけの言葉だった。

「ぞ、存じません」

きりきりと、胃が痛む思いで彼は答えた。

「確かに、お許しいただいた王宮の庭を散策中、偶然でもって小さな姫君と知り合う機会はございましたが」

ご立派なお心ばえの御方とお見受けいたしました。

だから王の言うところの『じゃじゃ馬娘』などと会った覚えはないのだと、訴えたアマンシールに、王は愉快そうに肩を揺らしてこう告げた。

「なるほど。王女との約束を頑に守ろうとするあたり、そなたの性質は、当代さまのおっしゃる通りらしい。いや、すばらしい、ファラスースの又従兄弟殿よ。よくぞ、これほど誠実な息子を育て上げたものだ」

父はただ、頭を垂れ「もったいたいお言葉でございます」と応じた。

この時点でもまだ、アマンシールはなにが起こっているのか……起ころうとしているのか、全然理解できずにいた。

（なんだ？　もしかして、さっきの質問は否定しちゃいけなかったのか？　それとも、出会ったときのことや、その後のこと、一部始終全部知ってて、そのどこかでおれが働いたかもしれない失礼を、こちらから謝ることを期待してたのに、そうした素振りを見せなかったことに腹を立てた、とか……？）

だったらどうしよう。

なにしろ、相手は国王陛下だ。

どう、対応するべきだろう。

大まじめに、真剣に、アマンシールが考えこむ寸前で、国王その人が、意外なことを言い出してきたのだ。

「あれは、我が娘であるが、どうにも一風変わった性格に生まれたらしくてな。女子の身で、やたら世の中のことを知りたがるのだ」

困ったものだ――と、ため息まじりに続ける国王の嘆きは、共感は出来なくとも、

想像はつくものだった。

この時代、社会は女性に対して、学識や知恵を求めたりはしていない。

男児に恵まれなかった上に、養子に迎える近い血縁者がいない家に生まれた女性を除けば、男性同様の教育を受ける者など、ほぼ皆無（かいむ）だ。女性自身、そうしたことを望みさえしない。

いや、思いつきもしないと言った方が正しいのかもしれない。

ところが……どうやら、あの少女は、そういう世間一般の例からは、大きくはみ出した存在らしい。

（ま、風霊に気に入られて、空を飛べる女の子のことを、ごく当たり前の普通の子だなんて、間違っても言えやしないだろうけど）

そう……あの日。

クランクレイアと出会ったあの日、彼女を背負って駆け込んだ当代柱神（ちゅうしん）――コーランジュの屋敷に迎え入れられた後、初めてアマンシールはクランクレイアが空から降ってきた理由を教えてもらったのだ。

すなわち、クランクレイアが尋常ならざる風霊の親愛の情を受ける存在であり、彼らの好意ゆえに、空を移動することさえ可能としている特異な風の愛し子であることを。

さらには、それをいいことに、彼女がそれまでも度々窮屈な王宮を抜け出し、コーランジュの屋敷に逃げこんでいたことなどなどをだ。

それでも、あの屋敷における彼女は、アマンシールの知っている少女たちと同じく、甘いものに目がなく、見ているだけで気分が悪くなりそうな量の砂糖菓子を景気よく口に運ぶ「少々風変わりかもしれないが、基本的には普通の少女」だったはずなのだ……が。

もしかして、それは、大いなる勘違いだったのだろうか。

（う、ううーん？）

混乱と疑問とで、頭のなかはすでにぐるぐる状態だった。

虚を突かれた、と言ってもいいかもしれない。

王は、まるでなんでもないことのような口調で、話を進めてきた。

「まあ、あれの生まれを思えば、ごく普通の女子に対する扱いをして良いとは思えぬのだが……な」

国王の思わしげな言葉そのものではなく、感じた違和感に素直に反応してしまったことが、アマンシールの敗因だった。

意味がわからず、思わず彼が口にした言葉は、

「はい？」

であり、すかさず父侯爵から、容赦のない肘鉄を食らったが、彼が心底「嵌められた」と思ったのは、次の瞬間、国王陛下が口にした言葉を耳にしたときのことだった。

「おお！　貴すぎる生まれゆえに、孤独しか友に持たぬ我が姫の心に寄り添ってくれると言ってくれるのだな！」

（そんなこと、ひとっことも言ってないのに！）

救いを求めて見つめた父の顔には、「馬鹿が、墓穴を堀りおって」としか読めない表情が刻みつけられていた。

（はい？　って、おれはちゃんと疑問形で返したぞ？　なのに肯定として判断するだなんて、どう考えても確信犯じゃないか――っっ!?）

どう考えてもこれは押し売りの手口ではないか。

要りませんの意味で「結構です」と言ったのを、敢えて曲解して「結構なことです」と受け止め、さらに話を進める――という……。

（タ、タチが悪すぎる……！）

もはや断れぬ空気が出来上がってしまっていることを感じながら、アマンシールは父が、早々に自分が望む進路を認めてくれた理由がわかったような気がした。

国王とは、国の柱――だから、特別な存在なのだとしても、だ。

こんな親玉が中心にどーんと居すわっているような宮殿で、自分にできることなどあろうはずがない。きっと、もう少しは格は下がるだろうが、親玉の雛型が、ごろごろ歩き回っているに違いないのだから！

政治と経済が、根っこの部分で強く繋がっているらしいことも考えあわせれば、そちらも狐狸妖怪の住処であることは疑いようがない。

だとしたら、自分の選択は、まさに正しいものだったのだ――そうは思うものの、もはや断りきれそうにない、この王の申し出は、いったいこの先どのような意味を持つことになるのか、不安に思わずにはいられないアマンシールだった。

無駄だろうとは思いつつ、それでも助けを求めて父に視線を投じた彼は、案の定綺麗に無視され、内心ため息を洩らした。

学院の授業の妨げとならない時間帯に限っての、先日知り合った王女の話し相手という役目は、そうしてなし崩しに決められてしまったのだ。

「どうしたのじゃ、ガジェス？　もしかして、チョコレートは好きではなかったのか？　確かに体質に合わぬ者もいると、どこかで聞いたような気はするが……ならば、焼き菓子はどうじゃ？　柔らかいのも固いのも、両方あるが？」

クランクレイアが言うのと殆ど同時に、香ばしいかおりを放つ焼き菓子が、両手で

持つトレイいっぱい運ばれてきた。
甘ったるい匂いが周囲に満ちる。
（うっわぁぁっ！　嗅いでるだけで、胸焼けしそう！）
一般的に香りと呼ばれるものであっても、感覚が人一倍敏感な者にとって、あるいはそれが強烈だった場合、受ける認識は、香りや匂いではなく『臭い』となる。
まさしく、このときのアマンシールの状態がそれだった。
（うわ、やば……！　正直、吐きそう……っっっ！）
とはいえ、悲しい家臣の身の上。
王女殿下の御前で吐くなど……吐くなど、もっての外だ。
（いったい、ど、どうしたら……っっ!?）
途方にくれたアマンシールにとっての救いの声がかかったのは、次の瞬間のことだった。
「クラン。自分の好みを押しつけるのはいただけないよ。どうやら君の客人は、あまりに甘いものは苦手なように見受けられるしね」

その声を聞いた途端、王女は音をたてて椅子から立ち上がった。

「兄上！」

叫んで、そのまま駆け出し、茂みから現れた相手に飛びついた。

（えっと……誰……？）

そう思ったアマンシールの意識を読み取ってか、彼女に抱きつかれた黒髪の巻き毛の少年は彼に微笑みかけてきた。

「……君が、アマンシール？」

問いかけられ、彼は素直にうなずいた。

それに対し、黒髪の少年は、これまでアマンシールが目にしたこともないほどに、柔らかくやさしい笑顔で、こう応じたのだ。

「そうかい。では、これからよろしく頼むよ、どうやら長いつきあいになりそうだからね。わたしはフィオーン。この子の兄で、君の先輩ということになるらしい」

その言葉の意味を、理解するのには多少の時間がかかった。

そして、理解した途端、アマンシールは叫んだのである。



「王女様の『兄上』って、つまりもしかして、王子様――――!?」

真っ青になった彼に、フィオーン王子は怪訝そうに問いかけてきた。

「わからないな。なぜ、わたし程度の身分に狼狽えるかな？」

そして――そうして、とびきりの爆弾を落としてくれた。

「クランなど、まさに女神の娘だというのに――」

と。

5

適度に甘味をおさえたものなら、菓子の類(たぐい)は嫌いではないな、とアマンシールは翌日の授業の予習をしながら思った。

机の上には、土産(みやげ)にと持たされた焼き菓子の包みがある。

頭を使うのは、意外に栄養を消費するらしく、すぐに空腹になってしまうのだが、そうした際、甘味は非常にありがたい補助食品となってくれるのだ。

とはいえ、水気なしにいくらでも食べられるものではない。

（お湯でももらって来ようかな）

そう思ったとき、背後から声がかかった。

「お、いい匂(にお)いがすると思ったら、美味(うま)そうなもの食ってるじゃないか」

振り返るまでもなく、アマンシールはその声の主を知っていた。
同室で同級の少年である。
名をハーリクという。
赤茶のくせっ毛と、そばかすが愛嬌をかもしだす陽気な性格の少年は、多少口数が多くうるさいことを除けば、アマンシールにとっては数少ない、ありがたい友人のひとりだ。
「よかったら、半分食べる？　ひとりじゃ多いと思ってたところだし」
いつものようにそう尋ねると、ハーリクはハシバミ色の瞳をぱあぁっと輝かせた。
「ああ、お前って、本当にいいやつだな！　じゃあ、おれが食堂からお湯をもらってきて、とびきり美味しい茶を淹れてやろう」
因みに茶葉はアマンシールが自宅から持参したものだ。
暖かい南方でしか取れない茶は、ディエーンにあってもまだあまり一般的な飲み物ではない。学院の生徒のなかでも、茶葉を寮内に持ち込んでいるのは一割に満たないと言われている。

茶道楽の叔父からあれこれ薫陶を受けたというハーリクの淹れるお茶は、文句なしに美味しいことを知っているアマンシールは、この提案を受け入れた。

それに……少しばかり、彼には訊きたいことがあったのだ。

約四半時の後、ふたりで幸福な時間を満喫したころ、アマンシールは友人に切り出した。

「ねえ、ハーリクは確か、王族関係に詳しかったはずだよね？」

赤茶の髪の少年は、けっこうな勢いで焼き菓子を消費……もとい、頬張りながら、少し意外そうに目を瞠った。

「まあな。うちの土産屋じゃ、王家の方々の肖像画の写しも扱ってるからな。外国や田舎からでてきた客相手に、説明できる程度には詳しいつもりだけど……なんだ？どれか取り寄せてほしいのか？」

人気のある役者や女優の絵姿同様、王族の肖像画の写しは、けっこうな人気商品なのだ――特に王都ロスタロイド以外から訪れた者たちに。

女優の絵姿は風紀に悪いという理由で、見つかったが最後、問答無用で没収される

学院にあっても、王家の方々のそれらについての取り締まりはないこともあって、ハーリクは実はちゃっかり学内で、取り寄せ窓口を開いている。

「いや、そういうわけじゃないんだけど……女神の娘って呼ばれてる姫君とか、聞いたことあるのかな……なんて」

口にした途端、しまったかも、とアマンシールは思った。

なぜなら、あれほど夢中になって焼き菓子を食べていたハーリクがぴたりと動きを止め、しかも口をぽかんと開けたからだ。

口一杯に頬張っていた菓子のかけらが、ぽろぽろと零れ落ち、アマンシールは慌ててしまった。

「ハーリク！　ハーリク！　零れてる、零れてるよ！」

咀嚼済みの焼き菓子が、口から落ちるさまなど、見苦しいことこの上ない。

さらに言うなら、季節は初秋――古い造りの寮内では、まだまだ蟻の脅威が生きているのだ――その凄まじさをアマンシールが知ったのは、寮に入ってからのことだったが。

「うわあ、床にまで！　雑巾っ！　雑巾を……っっ！」

その叫びが、ハーリクの意識を現実に引き戻した。

「ば、馬鹿、やめろ！　床に落ちた分はともかく、服に落ちた分まで取るな！　一、二、三の規則を知らないのか!?　三つ数える間なら、汚れはつかないんだよっっ！」

妙な理屈をこねて、服の上に落ちた焼き菓子だった代物を、慌てて再び口に運ぶ友人の食い意地に、アマンシールは呆れるより先に感心してしまった。

しみじみと、つぶやいた。

「ハーリク……きみって……凄いねえ」

対する少年も、あっけらかんとしたものだった。

「おうよ、食べ物に対する執着には自信があるぜ。このおんぼろ寮じゃなかったら、床に落ちたもんだって、拾って食うね、おれは。生きるか死ぬかの瀬戸際になったら、きっとネズミだって蛙だって食える自信があるぜ。下手物だろうがなんだろうが、食えるもんは食うべきだと思うしよ」

なぜか偉そうに胸を張ってそう主張した友人に、心から賛同の意を表したアマンシ

ールだった。

「うん、そうだよね。わたしも、森のなかで迷子になった時は、食べられそうなものはなんだって食べる気になったもんな。でも、ハーリク、ネズミは知らないけど、蛙はちっとも下手物なんかじゃないよ？　鶏のささ身に似た歯ごたえで……お腹一杯になるには山ほど食べなきゃいけなかったけど」

あと、ネズミは病原体の運び手になることが多いから、食べるとしても、じっくりしっかり熱を通した方がいいよ、絶対。

かつて、屋敷の近辺で、珍しい植物やら動物を見かける度に、ふらふらと森に彷徨いこんだ挙げ句、最長十日もの間、自給自足したという経験を持つ、侯爵家の御曹司は、あくまで自然にそう言った。

しかし、ハーリクは心底驚くべきことを聞かされたという顔で、アマンシールを見返してきた。

「く、食ったことがあるのか……本当に、お前？」

「だから、ネズミはないって……」

「けど、蛙はあるんだな!?」
ものすごい……迫力だった。
「う、うん」
と、うなずいた瞬間、ハーリクはがし、とアマンシールの両肩を摑んできた。
「なら、ぜひとも教えてくれっっ！」
尋常ならざる形相で、頼みこんでくる友人を前に、アマンシールは「先に頼むつもりで質問したのはわたしのほうのはずだったのに」……なにかが変だ、と思った。
「な、なにを？」
恐る恐る尋ねた彼に、ハーリクは答えた。
「蛙の生態！」
繋がりがありそうでなさそうなその言葉に、アマンシールは言葉を失った。

「だからさー、植物の観察なんて、誰だってやってることだろう？　みんなやってることを題材に選んでも、高い評価は狙えないと思ったんだよ」

一応落ち着いてから聞き出したところによると、ハーリクの「蛙の生態教えろ」発言は、博物初科の授業における課題が原因らしかった。

「観察できるものなら、なにを選んでもいいって教授が言ったもんだからさ。ありふれた内容じゃ、おれの数学や物理の致命的な成績は補えないだろ？　だから、ここは頑張って、ほかのやつらが選びそうにないテーマを……と、思ったまではよかったんだけど……」

改めて考えたとき、自分が蛙の生態以外みたことがなかったことに気づいたのだそうだ。

「なら、テーマの変更を、教授に申し出ればよかっただけじゃないか」

申請さえすれば、内容の変更は許されている。

無謀なテーマを選んだ学生のための逃げ道である。

だが、その言葉にハーリクは大きくかぶりをふった。

「できるもんか！　ノーシャンのやつ、『是非とも、皆が感心するようなレポートを書き上げてくれ、土産屋の小倅くん』なんて言いやがったんだぜっっ!?」

ノーシャンとは、やはり彼らの同級で、ロスタロイドでも有数の富豪出身の子供だった。

入学して間もないころ、アマンシールが自宅から持参した私物が、自分のものより上質だったことに気づいて以来、なにかと難癖をつけてくるようになった、はた迷惑な相手である。

そして、そんな彼と親しくつきあっているという理由で、ハーリクも目の敵にされているのだ。

ふう、とため息をついて、アマンシールはうなずいた。

「そういうことなら……」

なにしろ、自分にも責任があることだ。

「できるかぎりの協力は惜しまないよ。けど、その前に、話を戻していいかな？」

なんだかいつのまにかずれてしまったが、彼は問題を忘れてはいなかった。

そして、それはハーリクも同様だったようで――。

「話？」

一瞬だけ首をかしげたものの、すぐに「ああ」とうなずいた。

「『女神の姫君』のことだな？　確かにいらっしゃるよ。ただし、公にはされてらっしゃらないけどね」

それはなぜかと尋ねた彼に、赤茶の髪の友人は、声をひそめてこう答えた。

「詳しいことはわからないけど……多分、ほかの国に奪われたりしないためだと思う。なんたって、姫君のお母上は、虹神のおひとりらしいからな」

あまりのことに、アマンシールはすぐには言葉が出て来なかった――。

「陛下には、隣国のガッシュマサラからお迎えになった王妃さまとの間に、おふたりの王子さまがいらっしゃるわけだけど、これはいくらなんでも知ってるよな？」

念を押すように尋ねられ、アマンシールは「一応」とうなずいた。
「確か、フィオーンさまと……」
もひとりの名は知らないから、曖昧に誤魔化す。
それに気づいているのかいないのか、ハーリクはつづけた。
「そ、フィオーン王太子殿下とケルティス殿下のおふたりだ。ところが、七年前、陛下は突然生まれたばかりの女の赤ん坊を連れてらして、ご自分の子だとおっしゃられたわけ。母君は夢で逢瀬を重ねた女神さまだとね」
大まじめに説明してくれるハーリクには悪いと思ったが、アマンシールは首をかしげずにはいられなかった。
なんというか……あまりにも嘘くさいと思ってしまったのだ。
「それ、みんな信じたわけ？」
下手をすれば不敬罪で捕まりそうなことを、アマンシールは問いかけた。
さすがに、危険な内容だと感じたのか、ハーリクは「しぃっ」と指を唇に当てた。
「滅多なこと言うなよ。誰かに聞かれたら、まずいことになるの間違いないんだか

ら！　お前は特に、ノーシャンのやつに睨まれてるんだから、言動には気をつけろ。……まあ、聞いた話じゃ、内心はともかく、みな受け入れたそうだぜ。男のお子さまだったらともかく、姫君だったこともあってな」

どっちがまずいことを言ってるんだか、とアマンシールは思ったが、もちろん黙っていた。

（ガッシュマサラはここ十数年で、勢いをつけてきた国だもんな。和平のために王妃さまを迎えたわけだから、ほかに女性がいたら、やっぱりまずいだろうし……ああ、だから、女神の姫君ということにしたのかな？　女神が相手では、王妃さまも御実家のほうも、うるさくは言えないだろうし……）

いくら、政治向きのことに興味がないとは言っても、ディエーンの政治と経済に深く係わっているファラスース侯爵家に生まれ育ったアマンシールである。

自然にその程度のことは耳に入ってくるし、必要とあれば情報をもとに考えるぐらいのことはできるのだ。

「でも、最初はともかく、一年と経たずに、みんな姫君のことを、まさしく女神のお

子だと認めたらしい。なんでも、姫君には不思議な力があって、とてもそれはただの人間が持てるようなものではなかったらしいから」

人智を超えた力って、いったいどんなものだろうな――そうつぶやくハーリクとは違い、アマンシールには、思い当たることがあった。

ので、思わず、

「ああ、あれか……」

と洩らしてしまった。

はっと息を呑み、目を丸くするハーリクを見た途端、しまったと思ったが、時すでに遅しである。

「あれか……って、お前……」

「あ、いや……その……」

しどろもどろになるアマンシールを、ハーリクはしばらくじっと見つめていたが、やがて目を逸らすと、深い息を洩らした――いささかわざとらしいくらい大げさに。

「……お前が、休みごとに甘い菓子振る舞ってくれる理由、わかったような気がする

よ。間違っても自分で買うほど、お前甘いもの好きじゃないもんな。やたらいい茶葉持ってるし、姿勢も歩き方も、きちんと教育されてるってことは見て取れたけど……まさか、王宮に出入りが許されるような大家の出とは思わなかった」

すっかり確信を固めている様子のハーリクを相手に、いまさらしらを切ったところで無駄であることは明白だった。

「あれは、えーっと……たまたま連れてかれただけで、庭で迷ってたら、やっぱりたまたま……その……」

なにをどう、どこまで説明していいものかどうかわからず、アマンシールは冷や汗をかく思いだった。

そして、そんな彼にハーリクは呆れたようにこう告げたのだ。

「あっさり認める馬鹿がいるかよ。お前、本当に迂闊だな。そんなんじゃ、絶対すぐに、ノーシャンのやつにばれるぞ？　あいつ、自分が一番じゃないと気が済まないからな、お前が大貴族の息子だなんて知ったら、苛めて苛めて苛めまくってでも、ここから追い出そうとするぞ、きっと」

もっとも――と、ため息まじりに彼はつづけた。

「もう、遅いかもな。お前、この間の植物学の小試験、あいつを抜いて一番だったし……」

「植物学の小試験って、まだ答案は返ってきてないじゃないか」

「教員室に行ったとき、小耳に挟んだんだよ。教授のなかにも、うちの御贔屓はいるもんでな。王妹殿下の肖像画は、取り扱ってるとこが少ないから、大人気なんだ」

よもやまさか、教授陣を相手にまで、取り寄せ窓口を開いていたとは――意外性では自分以上に違いない、とアマンシールは思った。

そして同時に、自分が貴族出身だと知っても、態度を変えない友人の姿にほっと安堵した。

出会って一月足らずだったが、嫌われたら辛いと思うほどに、ハーリクのことを好きになっていたことを、このとき初めて自覚したアマンシールは、こっそりとため息をつきながら、こう思った。

（少なくとも鈍感なのは、もう否定できないな）

と。

6

結局、『女神の姫君』であるクランクレイア姫が、どんな少女なのか、さらにはどんな不思議な力の持ち主なのかを説明させられた後、ようやくハーリクが再開してくれた話によると、姫君が公(おおやけ)に認められなかったのには、深いある事情あってのことらしい。

最初、国王はクランクレイア姫を、正式に王家の姫として世間に知らしめようとしたのだそうだ。

彼女の女神の姫君としての力は、周囲ではすでに認められていたから、それに問題はないはずだった。

世継(よつ)ぎの王子を除けば、王子も王女も、五歳になるのを待って、式典に出席するよ

うになり、このことで正当な王家の一員として周囲に認知されるのだ。

クランクレイア姫は二年前、そうなるはずだった。

「だけど、結局陛下は姫君を公の席にお出しにならなかったんだ。あんときは、うちの親父ががっかりしてたからな、よく覚えてるよ」

なんでも、王家の方々の肖像画は、正式にお披露目がすまないうちは取り扱いが禁じられているのだそうだ。

「なんたって、女神のお子さまの王女さま、だろう？　人気になるのは目に見えてたから、親父はいまかいまかと待ってたんだよ。ところが、いつまでたってもお披露目の気配もないとなれば……なにかあったと考えるしかないだろ？」

そこで、ハーリクはさすがに声をひそめた。

「あくまで噂らしいけどな。どうやら、姫君は一度攫われそうになったらしい」

意外な言葉に、アマンシールは目を瞠った。

「攫われそうに……って、いったい誰がそんな……」

ハーリクが、肩をすくめながら答えた。

「噂だって言っただろう？　知るかよ。だけど、もしかしたら、誰っていうより、どこっていったほうが正しいのかもしれないって話だ」

（誰、ではなくどこ……）

「それって、どこかの国がってこと？　でも、なんで他国がディエーンの王女を……？」

誘拐することに、どんな意味があるというのか。

クランクレイアがもし、男児であったなら、あるいは王妃の祖国であるガッシュマサラが刺客を送りこむことも考えられないではないが、彼女は女の子なのだ。すでにふたりの王子がいる以上、脅威になるとは思えないし、第一、それではなぜ攫うことになるのかがわからない。

「だからさ」

と、ハーリクが声をひそめたまま、ささやいた。

「ディエーンの王女さま、じゃなくて、女神の姫君を欲しがってるどこか、があったんじゃないかってことだよ」

そこまで言われれば、さすがにぴんときた。

「……柱神さまのいない国、とかが……？」

「考えられないことじゃないだろう？　柱神さまのいない国なんて珍しくもないけど、柱神さまのいらっしゃる国と同じぐらい豊かな国はそうそうないわけだし」

それはそうだ。

柱神は、世界の『空』を支える存在であると同時に、精霊たちに愛される者。

彼らが住むところは、精霊の祝福を受け、恵み多い豊かな土地となる。

そうでない土地が痩せて貧しいと限ったわけではないが、それでも精霊の祝福の有無が、ひとの暮らしに大きく係わってくることは確かな事実なのだ。

かつて、世界に柱神は百八人いたという。

けれど、暗黒時代を境に、その数は半分近くに減ってしまった。しかもその全員が常に揃っているわけでもなく、俗世との関わりを嫌い、人知れず隠棲する者も少なくないと聞く。

どうしたって、すべての国が柱神の守護を受けられるわけがないのだ。

「だからって……女神のお子さまを攫うだなんて。母親である女神の怒りを買うとか、思わなかったのかな？」

「おれが知るかよ。そんな無茶なこと考えるやつらの頭の中身なんて。ただ、物心ついて間もない子供なら、攫ってもすぐに手懐けられるとでも思ったんじゃないか？」

聞けば聞くだけ、胸の悪くなるような話だが、確かにそういうことだとすれば、話の辻褄はあう。

正式にお披露目されてしまえば、クランクレイアの肖像画は広く世間に出回ることになる。それは、誘拐を目論む側にも顔が知られてしまうということだ。

確かに危険すぎる。

（あ、もしかして、だから当代さまはわざわざ王宮の一角に居を構えてらっしゃるんだろうか？　姫の安全のために……？）

あり得ない話ではない。

（だけど、そういうことなら……）

「……ねえ、ハーリク。姫君は、ずっとこのまま、公には認められないまま過ごされ

るんだろうか？」

それは、あまりにも気の毒なことに思えた。

深窓の姫君の多くが、さほど広い世界を知らぬままに暮らしているのは知っている。かく言うアマンシールの母も、ダランジェイドの屋敷から、ほとんど出ずに暮らしている。避暑や避寒に出かけようにも、忙しい夫と息子たちはつきあってはくれないので、「こんなことならひとりぐらい娘が欲しかったわ」と愚痴を零すことしきりである。

そんな風に、狭い世界にも不満を覚えることなく、幸せに暮らしていける女性もいる。けれど……。

あの空飛ぶお姫さまは、とても王宮だけに留まっていられる性格には思えないのだ。

王宮は広く、また当代柱神さまの屋敷は不思議で満ちあふれた空間だから、いまはまだ退屈など覚えてはいないだろうが、この先もずっとそうだとは限らない。

もし、彼女が外の世界に興味を覚えたとして、そのとき、それが許されなかったら

――しかもそれが自分の安全のためだと言われたら。

あの勝気で意地っ張りで、けれど心根のやさしい少女は、どんなに苦しむことだろう。

それを思うと、暗澹たる気分になった。

アマンシールの表情から、なにか感じ取ったのだろう――ハーリクは、励ますように明るい声を上げた。

「いや、きっといつまでもってことはないよ。いまはまだお小さいから、お披露目はないだろうけど、もう少し大きくおなりになって、そうだなお年頃にでもなったら、さすがに陛下も隠したままにはなさらないさ」

「そ、そうかな」

「そうさ」

励ましてくれるハーリクの心が嬉しくて、アマンシールは思わず微笑んだ。

そして、心に誓ったことが、ひとつ。

（面倒だなんて思わず、姫におつきあいしよう。兄君たちを除いたら、わたししか年

の近い人間はいないんだし……）

甘すぎるお菓子も、脳の栄養になると思えば、美味しく食べられるはずだと、彼は無理やり言い聞かせた。

気の持ち方次第で、物事から受ける印象というものは一変するものだ。

クランクレイアと過ごす週末の午後の時間が、まさにそうだった。

こちらから、興味を持って話しかければ、少女はきちんと答えてくれるし、逆にこちらに話をふってくることもあった。

「のう、ガジェス。王立学院では、どんなことを勉強しておるのじゃ？　普通、貴族の子弟は家庭教師につくか、神学院に進むものだと聞いたが、あえて風変わりな進路を希望したということは、学院でしか学べぬことでもあるのか？」

空飛ぶ王女に風変わりといわれては、最後のような気がしないでもなかったが、そ

れは胸にしまっておく。

どうせ、風変わり云々は、おつきの女官あたりが洩らした言葉に違いなく、彼女自身他意があって使っているとは思えないから、というのもあった。

「そうですね、まだ入学したばかりですから、どれも入門編みたいなものですが、二年に進級したら専門的な授業も入ってくる予定ですから、それを楽しみにしてるんです」

「専門……たとえばどんなことを専門に学びたいのじゃ？」

紫水晶の瞳を、きらきらさせて尋ねてくるクランクレイアは、実はけっこう聞き上手だった。

「いろいろありますが、いまのところ一番知りたいのは植物の品種改良の知識ですね。これればかりは神学院で学ぶのは難しいことですから。土壌の改良にも限界がありますし」

「土壌……土のことじゃな。ガジェスは土のことに詳しいのか？　なら……」

ちょっと待っててくれ、と言い置き、彼女はどこかに駆けだした。

思い立ったら即実行という、せっかちな面もある彼女は、一言の説明もなく飛び出すくせがあった。

もっとも、珍しい植物を見かけるなり、ふらふらと誘われたあげく迷子になる自分の悪癖よりは罪がないので、アマンシールは黙って彼女が戻るのを待つことにしている。少なくとも彼女はそのまま消えっぱなしになったりはしないのだから。

ただし、おつきの侍女たちも同じわけではない。

「姫さま！　そのように裾を翻して走るなど、はしたのうございますよ！」

声を上げて叱りつけるのだが、クランクレイアの足を止めることはできない。

「すまぬ！　小言なら後で聞く！　いまは一刻の猶予もないのじゃ！」

大げさなことを言いながら、彼女は全力でどこかへ走っていく。

そんな彼女の背中を見つめながら、二十代半ばに見える侍女は肩をすくめた。

「嘘ばっかり。そのころには忽然と姿を消されるくせに」

訪れはじめたころには、隙のない言動を崩さなかった彼女たちも、馴染みになるにつれ、くだけた様子を見せるようになった。

特にこの女性――ライラーナは、一番好意的な人物だ。もちろん、お目付役であることに違いはないが、庭で植物採集をしたり――当然、土いじりも含まれるわけだが――採集した植物を図鑑で調べたりといった、淑女にはふさわしくないとされることも、文句を言いつつ許してくれる。

難を言えば、口やかましいところだが、彼女の口調からは、いつも好意が感じられるので、クランクレイアと一緒に小言をもらうことになっても、アマンシールはあまり気にならないのだ。

そういえば、と気になっていたことを思い出し、アマンシールはライラーナに問いかけた。

「姫はその……空の散歩をなさってるんでしょうか？」

その言葉に、ライラーナは一瞬息を呑んだが、彼が知っていることを思い出したのだろう、すぐに緊張を解いた。

「そうでしたわね、侯子さまはご存じでらっしゃるんでした。ええ、まだ時折……侯子さまがいらっしゃるようになってからは回数は減りましたけれど」

ため息まじりの答えには、苦々しげな響きが宿っていた。

「お止めになるよう、申し上げるわけにはいかないのでしょうか？　いくら姫が精霊たちの厚い加護をお持ちでも、万が一のことがないとも限らないわけですから……」

話し相手としての分を弁えない発言かな、と思わないでもなかったが、出会いが出会いだったから、心配せずにはいられない。

あのときクランクレイアは「そなたが突然大声など出すから、風霊たちが驚いたのじゃ。いつもは危ないことなどない」と主張したのだが、いつまた風霊を驚かせるできごとが起こらないとは言い切れない。

少なくとも一度あった以上、絶対はあり得ない。

「口が酸っぱくなるほど申し上げておりますわ。ですが、姫はこのことについてだけは、耳を貸してくださらないのです。風霊がそばにいて、危険なことなど起こるはずがないとおっしゃって……」

いえ、あったんですけど――とは言えなかった。

あの件に関しては、クランクレイアから固く口止めされているのだ。当代さまの目

の前で約束させられた以上、破ることはできない。

「けれど、侯子さまがものの道理のわかる方でよかったですわ」

しみじみと言われ、アマンシールは思わず首をかしげた。

「姫さまのお力を目の当たりにされたと聞いたとき、一緒に空を飛びたいなどとおっしゃられたらどうしようかと心配しておりましたの。姫さまにも、くれぐれもそれだけはなさらぬようにと申し上げましたのよ」

ライラーナの懸念はもっともと言える。

空を飛んでみたいと、一度でも考えたことのない人間は滅多にいないだろうから――アマンシールにしても、ただクランクレイアが空を飛んでいる姿を目撃しただけであったなら、口に出して頼むかどうかは別として、願わなかったとは言い切れない。

だが、あの小さな体が、あれほどの衝撃をもって落ちてきたのを背中で受け止めたのだ。とてもとても、自分もなどとは口にできるものではない。落ちて怪我するのが自分だけならともかく、彼女を道連れにすることにでもなったら……考えるだけで冷

や汗がでる。

「……別に、地に足がついてないと不安な気がするだけです……」

もごもごと歯切れ悪く答えるが、ライラーナは彼の態度に不審を抱いた様子は見せなかった——というより、彼女自身、なにか気がかりなことを抱えていたらしい。

ほう、と憂いを孕んだ息を洩らし、彼女は小さくつぶやいた。

「侯子さまのような方ばかりなら、わたくしも安心していられるのですけど……」

なにか引っかかるものを感じ、アマンシールはライラーナに目を向けた。

しかし、彼がなにか口にする間もなく、その場の空気は破られた。

「ガジェス！　これじゃ、この鉢植えなのじゃが、昨日あたりからしおれて元気がないのじゃ……！」

両手で大切そうに鉢植えを抱えて、クランクレイアが戻ってきたのである。

可憐なピンクの花の咲くそれは——もう晩秋近いいま、目にするはずのない桜草だった。

（さすがは当代さまのお屋敷の庭……）

けれど、もう少しは季節感があってもいいのではないか、とアマンシールはちらりと考えた。

因みに、鉢植えの不調の原因は、水のやりすぎによる根腐れだった。この日クランクレイア姫は、『過ぎたるは及ばざるがごとし』という言葉を胸に刻んだのである。

そこは、地上でありながら、厳密には地上とは呼べない不思議の地――。

確かにディエーン王宮の庭と繋がっておりながら、不可視の膜で次元を異にする夢幻の庭。

そこにあっては季節は混在し、四季の花々は常に咲き誇りつづける。

当代柱神と呼ばれる存在は、そんな自身の庭を静かに歩いていた。

紫水晶の双眸は、愛しげに細められ、庭の花々に向けられている。

さやさやとそよぐ風は、彼女にやさしく触れはするが、決して結い上げた髪を乱し

たりはしない。世界の『空』を支える彼女に、精霊たちが害をなすことはあり得ないのだ。

「二百年……」

ひっそりと彼女はつぶやいた。

「長かったというべきか、あっと言う間だったというべきか……」

そうして彼女はゆっくりとかぶりをふった。

「いえ、そうね……短かったとは言えないわね……」

その彼女の右の薬指には、黄玉が嵌め込まれた指輪がある。

柱神の半身——ひとである存在を神の眷属に生まれ変わらせる……黄昏の黄金という銘を持つ神宝。

指輪に選ばれたとき、彼女はすでに五十を超えていた。政略結婚とはいえ、結ばれた夫を愛し、ふたりの娘と三人の息子の成長も見届け、あとは静かな日々がつづくのだと信じていた身にとって、選定者の決定は、正直嬉しいものではなかった。

ひとでなく、神の眷属に加えられるということの持つ残酷な意味を、いったいどれ

ほどの者が気づいているだろう。

年上だった夫との死別は、まだ諦めがついた。

けれど、それから間もなく起こった血みどろの内乱と、その最中に命を落とした子供たちのことは諦められるものではなかった。

生き残ったのは、末の息子ひとりきりだった。そしてその息子は、彼女が敬愛していた当時の王家を倒し、新たな王朝を打ち立てたのだ——母たる自分が柱神に選ばれたがゆえに。

柱神に選ばれた者の家系にある者こそが、新たな王朝の開祖となるという、忌まわしい伝統は、またしても繰り返されてしまったのだ。

そのことを、ただ悲嘆するだけで、無為に時を費やした自分の愚かさを、いまになって彼女は悔いていた。

なぜ、二度と繰り返させないための方法を考えようとしなかったのか——なぜ、そのために自ら動こうとしなかったのか。

なぜ、命の終焉近くなったいままで、そのことに気づきさえしなかったのか。

二百年ものあいだ、止まっていた老いが、再び進みはじめたことに気づく前に……なぜ。

「いえ……いいえ。まだ、遅すぎはしないはず……」

両手を固く握りしめ、彼女は唇を噛みしめた。

（まだ、できることはあるはずだわ）

祈るように、彼女は自身に言い聞かせた――。

ディエーンは、冬を迎えようとしていた。

あとがき

こんにちは、前田珠子です。

この度は『天を支える者　古戀唄（いにしえこいうた）』をお手に取っていただき、ありがとうございます。

この作品は、『天を支える者』の番外編であります。

本編ではすっかり落ち着き、主人公たちを暖かく見守っている柱神（ちゅうしん）アマンシールの若かりしころの話です。

けれど。

申し訳ありません！

つづいてしまいました。

最初、この話は雑誌掲載用の短編ネタとして考えついたものです。

まだ人間で、しかも少年だったアマンシールの恋と友情を、うんとドラマティック且つロマンティックに書きたいな、と思ってプロットに着手。

手書きでやってた時と同じく、けっこうぐちゃぐちゃ、ああでもないこうでもないと手を加えていく内に、話がどんどん固まってくれたのはよかったのですが、一方、膨らみもするという困った事態に（苦笑）。

「どう考えても、これ、短編のネタじゃないよ……」

とほほな気分で頭を掻きむしったものです。

そうはいっても、一度膨らんでしまった話は縮んでくれないし、一度固まった話もほぐれてはくれません。

「ここまで作っといて放り出すのもすっきりしないから、プロットだけはまとめてしまおう」

と思い、そのまま進行……。

結果、原稿用紙にして三十枚になんなんとする長大な代物に。

とは言え、プロット書いてる最中に、
「あ、これ切り口変えたら短編でいけるかも」
と思いついたので、書いた甲斐はありましたが。
そうして書いたのが、『古恋歌』――読みは同じでも字が違う。
果たしてどこがどう違うのかは、作品を読み比べてお探しください（ありがとう、ナルレイシア！　君のおかげだ）。でもこれも結局短編にはおさまりきれず、中編に化けてしまったのですが。
因みに、出来上がったプロットを担当さんに提出したとき、
「このままだと、丸々一冊かかっちゃうと思うんで、切り口変えて、同じ話のはずなのに、なんだかパラレル？　みたいな作品にまとめようと思うんですが」
と言ったわたしに、担当さんは少し間をあけて、
「……そうですね、このまま書いたら三冊にはなっちゃいますね」
とおっしゃいました。
そして、今回、実際に書いてみて……まあ、読みの甘さと実力不足が祟って、規定

のページ数に届かなかったことを差し引いても……担当さんの言い分の正しさが証明されてしまいました。

久々に目指したはずのロマンスはいずこ？　主役たちがまだ子供でも『小さな恋のメロディ』という線もあったはずなのに……甘やかな空気が皆無なのはなぜ？　そもそも『空から女の子が降ってきた』というシチュエーションは王道のはずなのに……。

これは、単にふたりがお子ちゃまだからなのか、それとも私がすでに、ロマンスを書きたくても書けない体質になってしまったからなのか——うーん、後者でないことを祈ろう。そうでないと、今回もうひとつ挑戦した『久々に書く正統派美形』も実現不可能となってしまう……。

さて、長々と書いてきましたが、つまりそういうことで、つづいてしまいましたこの話、なるべく早い時期につづきを書かせていただきますから、どうかおつきあいください。次こそは、読みごたえ充分な本にして、お届けしたいと思っておりますので。

今回も、ぎりぎりの日程まで締め切りを引き延ばし、関係各所の方々に、多大なるご迷惑をおかけしてしまいました。

この場をお借りして、お詫びいたします。

明咲トウルさま。

カバーイラストの美しさにくらくらしました。なのに、あそこまで進展させられず、申し訳ありませんでした。

読んでくださる方々。

初心に戻って精進中です。これからもおつきあいいただければ幸いです。

それでは――。

平成十七年　某月　某日

前田　珠子

この作品のご感想をお寄せ下さい。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
古懸唄（いにしえのうた）

COBALT-SERIES

2005年8月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社 集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230)6268(編集)
電話　東京(3230)6393(販売)
(3230)6080(制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2005　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600624-3 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

不幸の中にも必ず幸せはある!?
本好き少女の痛快ファンタジー!

天を支える者 1~2

前田珠子

イラスト／明咲トウル



無類の本好きである少女ナルレイシアは「不幸中の幸いの権化」の異名を持つトラブルメイカー。ひょんなことから次の柱神を見きわめる〝選定者〟に選ばれてしまうが…!?

〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子

〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒

其は焔をまとう者

聖石の使徒

其は力を放つ者

聖石の使徒

其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒

其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒

揺籃の瞳

聖石の使徒

蒼の組木箱



〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子 〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／夏門 潤

漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1～3
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥



コミック版 好評発売中

破妖刀・紅蓮姫を操る剣士ラスの
愛と闘い…大人気ファンタジー！

前田珠子/厦門 潤

破妖の剣
魔性降臨
白い焔に包まれて消えた街——その原因を探るラスと少年ザハトだったが!?



破妖の剣
紅の魔剣 碧の魔胎
最愛の使い手を失い暴走する紅蓮姫…。ラスと出逢う前の紅蓮姫の哀しい物語。



破妖の剣
深紫絃韻 1 2
魅縛師リーヴィの里帰りに同行したラスは、思いがけないピンチにおちいるが…!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供します。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



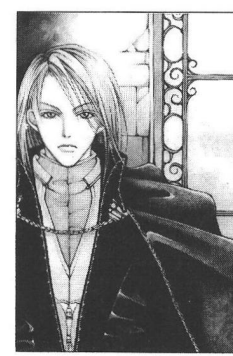
イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

約束の庭でほほえむ、美しい妖魔。
華麗なる王国の幻想ファンタジー！

タラスタロスの庭

前田珠子
イラスト／木々



狂王カァスタイーンは残虐な殺戮の末、遂に広大な国タラスタロスを平定した。だがその裏には、選ばれし者にしか見えない、空中に浮遊する庭で会った妖魔との約束があった…。

〈好評発売中〉 コバルト文庫

新宿に吸血鬼出現？私が巫女体質？
ファンタジック学園コメディ！

女神さまのお気の向くまま1〜3

前田珠子

イラスト／辻 よしみ



異界から侵入してくる怪物から「こちら側」の世界を守っているふたりの女神さま。そのひとり・嫦娥の依巫となってしまった高校生・桜子は超多忙、大迷惑な毎日を過ごしていて!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

美しく切ない叙情ファンタジー

前田珠子 〈月下廃園〉シリーズ

イラスト／江ノ本瞳

月下廃園

月華の国の王子で、風の愛し児トゥミャーンは、王宮の庭園で出会った美しい人物が忘れられず…。

月下廃園2

ある想いから、自らを月華の王宮の庭園に呪縛しているセジュン。そんな彼を慕うトゥミャーンだが。

月下廃園3

トゥミャーンは光明神殿の使者として、セジュンが消えた月華に3年ぶりに戻ったが!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

目覚めよ、永遠楽土を守る聖獣たち！

前田珠子 〈聖獣〉シリーズ

イラスト／おおや和美

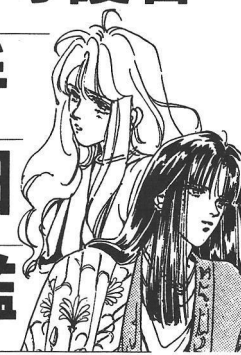
まどろみの守護者
聖獣復活譚 前

銀の守り手
聖獣復活譚 後

目覚める日
聖獣覚醒秘譚　第一部

深き闇の檻
聖獣覚醒秘譚　第二部

昏き夜の果て(上)(中)
聖獣覚醒秘譚　第三部



〈好評発売中〉 コバルト文庫

教えてあげよう――。
一流ホストの口説きのテクを。

ホストなあいつ

あさぎり夕
イラスト／あさぎり夕



同じサークルの律が出張ホストのバイトを始めたと聞き、心配する暁人。出版社の社長を務める叔父と行った映画の試写会で、偶然律の先輩ホスト、京也と出会った暁人は…!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

あの魔法バトルで再見参!

東京S黄尾探偵団

奥様は魔女!? リターンズ

響野夏菜

イラスト／藤馬かおり

合コンであぶれた慈吾朗の前に魔女が出現!? 謎の指輪の正体と変死事件解決のため、S黄尾が大暴れ。あのコミック版が小説で復活!



東京S黄尾探偵団 シリーズ・好評既刊

少女たちは十字架を背負う
青の封印
Kの処刑場
五月、拉致られる
さらば愛しき女よ
羊たちの祭壇
竹林温泉殺人事件
時計台の首縊りの鐘
コミック版 奥様は魔女!?

他18冊好評発売中

〈好評発売中〉 コバルト文庫

それぞれの夢に命を懸ける!

姫神さまに願いを

～夢者の孤国(むしゃのこく)～

藤原眞莉
イラスト／鳴海ゆき



織田信長を討つためにテンは、上杉、北条、武田、徳川の四家同盟を提案する。だが実現の道は険しく、謙信の身にも怪しい影が…!?

〈姫神さまに願いを〉シリーズ・好評既刊

姫神さまに願いを
～享楽の宴～
～浪の下の都～
～永遠国ゆく日～
～鏡語りの森～
～夢路の剣～
～巡恋夏城～
～血誓の毒～
～月の碧き耀夜～ 前編
～月の碧き耀夜～ 後編
～秘恋夏峡～
～殉血の枷～
～遠国散る恋華～ 前編
～遠国散る恋華～ 後編
～荊いだく蝶～
～空参鳥の幻～
～空葬の瞳～
～雪去りの紅～
～藍ちぎる瑠璃～
～緋承ぎの形代～
～摘みし緋の扉～
～虚白の磐座～

〈好評発売中〉 コバルト文庫

ウサギ神の守護を受ける少女の
学園退魔ファンタジー！

サディスティック★ラビッツ

天河りら
イラスト／杜　真琴



男として育てられた白兎。15歳になった彼女は、父親から東京の高校へ編入するよう命令される。その学園の敷地内にあるという、奪われた「七雄の匣」を取り戻せといわれて…。

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」（大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt（1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086006248

ISBN4-08-600624-3

C0193 ¥419E

1920193004199

定価本体419円＋税



コバルト文庫